ヨーロッパ企画第 37 回公演「サマータイムマシン・ブルース」

（180718　戯曲バージョン）
上田誠

■登場人物

・甲本　……SF研究会の男子メンバー。柴田を映画に誘う。
・小泉　……SF研究会の男子メンバー。よく喋る。
・曽我　……SF研究会の男子メンバー。みんなより一つ後輩。
・木暮　……SF研究会の男子メンバー。唯一の理系で、SF好き。
・新美　……SF研究会の男子メンバー。ビダルサスーンを使っている。
・石松　……SF研究会の男子メンバー。ガラクタを持って帰ってくる。
・柴田　……カメラクラブの女子部員。学内展へ向けて忙しい。
・伊藤　……カメラクラブの女子部員。野球しているSF研を撮影する。
・照屋　……カメラクラブの男子部員。この大学の歴史や伝承に詳しい。
・田村　……冴えない風貌の、実は未来からやってきた大学生。

■舞台

郊外にある大学の、サークル棟1階の部室。
古風な建物であり、部屋は割と広い。長年にわたる落書きやチラシなど。
下手奥に、入り口の扉。その外は廊下になっている。
上手側の壁には窓があり、そこから裏庭へと続いている。
部屋の片隅（奥上手寄り）には、暗室へと続くドアがある。
元々この広い部屋と暗室で、カメラクラブの部室だった。
が、今は広い部屋のほうは、SF 研究会の部室になっている。
長机やイスがいくつか、窓際にはビールケースにゴザを敷いて作られたくつろぎスペース。
ロッカーやスチール棚、黒板、テレビやファミコン、野球の道具など、雑然としている。
入り口近くには、カラーコーンや道路標識など、どこかから拾ってきたらしいガラクタ。
SFの本も置いてあるが、あまり読まれていない様子。
窓の近くには、古めかしいクーラーが。
そして、暗室のドアには白黒写真や、カメラクラブのチラシが貼ってある。
この暗室だけが今はカメラクラブの部室であり、SF研究会を通らないと入れない。

■シーン0

黒板に、スライド「2003 年　8月 11 日」。

照明がつくと、そこは夏の部室。

SF研究会のメンバーたちと、カメラクラブの部員たち、集まっている。
入り口近くにいる甲本に、みんな注目している。

曽我　（煽るように）もうじゃあ早速、やってもらいますか？
新美　例の、罰ゲームを！
皆　おおー！（盛り上がる）

甲本は、銭湯帰りの桶を持って、戸惑っている。

甲本　……は？
石松　いやこれは、いさぎいい。
曽我　なかなか出来ないですよねえ。
小泉　普通やんないからね。
柴田　どんな形から入んのかな。
伊藤　（カメラを構えつつ）初めて見る。

甲本は、戸惑いつつ。

甲本　いや待ってあの、全然分かんない。
新美　は？
甲本　流れが、見えない。
皆　いやいや。
小泉　だから早くやれよ。
曽我　引っ張るほどのもんでもないでしょう。
照屋　今、いい流れ来てるから。
曽我　（甲本の桶を指して）それ使ってこう、やればいいじゃないですか。

曽我は、裸踊りの動きをしてみせる。
と、肘が長机の上の、飲みかけのコーラのボトルに当たり、倒れる。
皆は笑っているが。

柴田　（倒れたコーラに気付いて）ちょっと！
曽我　え？
皆　（気付いて）ああ！
曽我　ああ、ごめんなさい！
小泉　お前、何やってんだよ！
曽我　ちょっと、タオルないですかそこに。
木暮　タオル。
石松　（そこらに置いてあるタオルを手に取り）うわ、これなんか臭いよ？
曽我　いいですよ別に。
新美　水差すなよ。
照屋　そんなんじゃ、バイトくびになるでしょう。

曽我、タオルを受け取り、コーラを拭くが。
机の上では、クーラーのリモコンが濡れていて。

伊藤　リモコン！
皆　あーあー！
小泉　ヤバイヤバイ！（リモコンを取り、振って水気を切る）
新美　大惨事じゃんかお前。
曽我　それ、ちゃんと拭いた方がいいですよ。
新美　だからこっち拭けよ。
曽我　ああ……。
木暮　（リモコンを見て）かなり濡れたけど。
甲本　……何これ。

音楽、大きくなり。
暗転。

黒板に、タイトル「サマータイムマシン・ブルース」が、映し出される。
続いて、キャストやスタッフのクレジットが照射されて。

音楽、フェードアウトしていく。

■シーン1

黒板に、スライド「8月 12 日」。

うだるような暑さと、蝉時雨の中。
照明がつくと、翌日の部室。

甲本・小泉・曽我の3人、腕を組んで座っている。
何かに耐えているようで。

小泉　……ちょっと、言っていい？
2人　うんうん。
小泉　一個、浮かんでる形容詞、言っていい？
2人　うんうん。

小泉は、耐えかねたあげく。

小泉　……暑いよね！
曽我　暑いっすよねえ。
小泉　言っちゃったけど。

甲本　それだけは言うまい、と思ってたけど。
曽我　心頭滅却しようとして、やり方が分かんなかったですもん。
小泉　なんだ心頭って。
甲本　もうだから、ここ（腕を組んでいるところ）が暑いよね。
2人　うんうん。
甲本　この、くっついてるとこが。熱をもって。
曽我　（体を開いて）もう、こうしてたいですもんねえ。なるべく表面積を広くして……

小泉は、曽我を叩く。

曽我　痛って！
小泉　お前がなんとかしろよ。
甲本　お前がこぼしたんだから。
曽我　しょうがないでしょうだって。リモコン以外、受け付けないんですから。
小泉　だから、扇ぐとか。
曽我　嫌ですよ。奴隷じゃないですかそれ。
甲本　こう、でかい葉っぱでな。
小泉　ひざまづいて。
曽我　奴隷。南国の奴隷ですよ。

小泉は、顔を伏せて。

小泉　クーラーがなー！
甲本　あるのに使えないってのが、すごい不条理だからねえ。
曽我　（クーラーを見て）なんであいつ、ボタンとか一切ついてないんですかねえ。
甲本　歯がゆさが、余計に暑さを助長してるっていう。

小泉はふと、テレビのリモコンを手に取って。

小泉　……これどう？
甲本　お前それ、テレビのリモコン……。
曽我　血迷いましたか、ついに。
小泉　じゃなくて、これを、どれか押すことで。なんか一個ぐらい、信号がヒットするんじゃないか、っていう。
甲本　（考えて）……ある。
小泉　ある！
甲本　やってみる価値はある。
曽我　意外と、いけるんじゃないですか。
小泉　じゃあ、（リモコンのボタンを見せて）どれからいく？
甲本　……電源じゃない？
2人　うんうん。
小泉　電源ね！
曽我　電気の源ですからねえ。

小泉、テレビのリモコンをクーラーに向けて、構える。
2人、ごくり、と注目する。

小泉　……（振り向いて）もう、すごいいける感じが、伝わってくるもん。
2人　おー！
小泉　（リモコンとクーラーが）シンクロし合ってるみたいな。
甲本　お互いが。

小泉、再びクーラーに向かって、構える。
2人、注目する。

小泉　……（振り向いて）もう今、風が吹いてくる絵が、見えたからね。
皆　おおー！
曽我　ビジョンが。
小泉　水色の矢印がこう。
甲本　ちょっと、早くやれよ。
小泉　間違いない。

小泉、三たびクーラーに向かって構える。
2人、注目。

小泉　……（振り向いて）もうだって、今涼しいもん。
甲本　やれよ早く！
曽我　前フリはいいですから。
小泉　（気を取り直して）いきます。

小泉、今度こそ、クーラーに向かって構える。
そして、祈りをこめ、電源ボタンを押す。
と、部屋の片隅のテレビがつく。

3人　……。

小泉、テレビを静かに消して。

小泉　……まあね！
甲本　そりゃそう！
曽我　テレビがつきますよねえ。
小泉　テレビのリモコンだから。
甲本　そりゃ、そうなるよね。
小泉　知ってたし。

曽我は、めげずにテレビのリモコンを指して。

曽我　次じゃあ、ボリュームとかどうですかねえ。
2人　あー。
甲本　温度をこう、調節する感じでな。
小泉　お前じゃあ、ちょっと（曽我にリモコンを渡す）。
曽我　ああ、僕が。
甲本　思い込むことが、大事だから。
小泉　さも、クーラーのリモコンだ、みたいな。当たり前に上げ下げできちゃうんだ、みたいな。
曽我　ええ、ええ。……（クーラーのリモコンだと思い込もうとする）

そこへ、カメラクラブの柴田、入り口から入ってくる。
カメラを下げている。

柴田　おはよう。
3人　おー。
柴田　（暗室を指して）誰か来てる？
甲本　伊藤がもう。
柴田　あっそ。

曽我は、何気ない調子で。

曽我　じゃじゃ、クーラーでもつけますか。
小泉　そうだね。

柴田は、暗室をノックする。

伊藤　……（声）はあい。
柴田　入っていい？
伊藤　（声）ちょっと待って。
柴田　現像？
伊藤　（声）うん。

柴田は、暗室の外で待つことに。
曽我は、テレビのリモコンをクーラーに構え、ボリュームのボタンを押す。
が、もちろん作動するはずもなく。

小泉　あれ、つかない？
曽我　（おかしいな、という調子で）そうですねえ……。
小泉　そんなはずないけどねえ。

柴田は、窓の外を見る。
そこには、ケチャ（犬）がいるようで。

柴田　ケチャ、また掘ってるねえ。
甲本　うん。そして何も出てこないっていう。
柴田　……なんか、探してんのかなあ。

甲本　骨でも埋めて、忘れたんじゃないの。

柴田は、ケチャの写真を撮ったりする。
小泉は、テレビのリモコンを受け取り、クーラーに試す。

曽我　……ね、機嫌悪いですよねえ。
小泉　（変だな、という調子で）つかないはずがないんだけどねえ。

と、あくまでクーラーのリモコンだと思い込もうとしている2人に。

柴田　（気付いて、怪訝そうに）あれ、何やってんの？
甲本　ああ……クーラーをつけようとしてるっていう。
柴田　ええ？
甲本　見ての通り。
柴田　だってあれ、テレビのリモコンじゃん。
甲本　（答えづらくも）そうなんだけど、分かった上で、あえて試行錯誤してるっていう。
柴田　何を？

小泉たちにも、そのやりとりは聞こえていて。
気になりつつも、柴田を無視して、リモコンを試し続ける。

甲本　だからほら、昨日リモコン壊れたじゃん。コーラこぼして。
柴田　うん。
甲本　だからこう……色々やってんだよ。暑いじゃん。
柴田　（通じず）だって、テレビのリモコンでしょ。
甲本　うん……。
柴田　テレビがつくだけじゃないの？
甲本　いやもう、まさにその通りなんだけど。
柴田　（リモコンを試している小泉に）え、え、ねえ。どういうこと？

小泉、進退窮まって、曽我を叩く。

曽我　痛って！
小泉　お前のせいで、とんだドンキホーテだよ！
曽我　いや、乗ってたじゃないですか。
小泉　これ（テレビのリモコン）でクーラーつけるとか、正気か！
甲本　（曽我に）だからやっぱり、お前が、ひと夏扇いでさあ。
小泉　上半身はだかで。
曽我　奴隷そのものじゃないですか。人権どうなってるんですか。

そのやりとりを聞いていた柴田、ふと思いついて。

柴田　そういえば、冷蔵庫。捨ててあったよ。
甲本　……冷蔵庫？
柴田　サークル棟出たとこの、ゴミ置き場に。
小泉　それはお前、なんだよ。
柴田　だから、涼しくなりそうじゃん。（冷蔵庫を）開けとけば、クーラーの代わりっぽくこう。
3人　（考えて）あー……。
曽我　（柴田を指して）エジソン、いましたねえ。こんなとこに！
3人　おお！
小泉　（柴田に）お前、ひらめいたなあ！
甲本　こう、（部屋を）冷気で満たすわけだ。
柴田　そうそう、部屋ごともう、冷蔵庫みたいな。
3人　はあー。
小泉　発想に、スケール感あるわ。（曽我に）早速、お前。

小泉と曽我、立ち上がって。

曽我　（柴田に）ゴミ置き場ですよね？
柴田　うん、ツードアのやつ。
小泉　うわ、冷凍庫にもなり得るじゃん。

2人、いそいそと部屋を走り出ていく。
甲本と柴田、2人になり。

甲本　……（柴田のカメラを指して）撮ってんの？
柴田　うん、もうすぐ学内展だし。
甲本　いつ？
柴田　来月のアタマ。
甲本　あー、けっこう追い込み？
柴田　うん。

柴田は、部室にあるガラクタを、被写体にしようと物色する。

柴田　……なんか、また増えてる気がすんだけど。
甲本　石松。邪魔でしょうがないから。
柴田　（道路標識を指して）これとかって、犯罪だよねえ。
甲本　うん、っていうか、どれも犯罪だから。
柴田　そっか。（カメラを構える）
甲本　どれも窃盗だから。あんまり撮らないであげて。

柴田は、ガラクタの写真を撮りながら。

柴田　……今日、あとの3人は？
甲本　木暮は今、リモコン直しに行ってて、あとの2人がオアシス。
柴田　こんな時間から？
甲本　老人に混じって。

柴田、ガラクタの中に置いてある、板状のなにかを「？」と見る。
甲本は、そういえば、という感じで。

甲本　柴田、最近時間ある？
柴田　ない。
甲本　ないの？
柴田　だって、学内展だもん。
甲本　……なくはないだろ。
柴田　（笑って）ないよ。
甲本　ちっとも？
柴田　うん。
甲本　……あったらでいいんだけど。（カバンから取り出して）いや、映画のチケットもらってさあ。駅前の映画館なんだけど。
柴田　あー。
甲本　2枚あるから、行かないかなーと思って。
柴田　うっそ、誘ってくれんの。
甲本　うん、よかったら。

柴田、映画のチケットを見て、悩む。

甲本　来週いっぱいらしいから。
柴田　なるほどー……。

そこへ、伊藤が暗室から、顔を出す。
現像が終わったようだ。

伊藤　お待たせー。
柴田　おー、おはよ。
甲本　（柴田に）まあ、考えといて。
柴田　分かった。
伊藤　（柴田に）昨日のやつ、できたよ。
柴田　うっそ、いい感じ？

柴田は、伊藤と暗室へ。
一人になった甲本、よしよし、という感じ。

そこへ、小泉と曽我、冷蔵庫を担いで戻ってくる。

小泉　ういー！
甲本　おおー！
曽我　涼しい夏を、お届けしますよー！
甲本　よく捨ててあったねえ。
小泉　もう、思し召しだよね。
甲本　天からの。

曽我、冷蔵庫のコンセントをつなぐ。

小泉　うわヤバい、これは画期的かもしれない。
曽我　セット、できました！
2人　おおっ。
小泉　凍えたらどうしよう。
曽我　もう今、（冷蔵庫が）唸りをあげてますからねえ。

小泉、冷蔵庫の扉に手をかけ。
「ガバッ！」と、開ける。

3人　おおー！　……いやいや。
小泉　まだ涼しくない。
甲本　電源入れたばっかだから。
曽我　（冷気が出ているところに手を当てて）……けどこれ、ほんのり来てないですか？
2人　（手を当てて）……あー！
甲本　ホントだホントだ。
曽我　こう、冷気が来てないですか。
小泉　来てる来てる！
甲本　そこはかとなく、こう……。

3人、冷気を感じ、涼しがる。

小泉　ああ、これはいいなあ。
甲本　もうこれ、クーラーいらないなあ。
曽我　趣がありますよねえ。
甲本　クーラーよりむしろ。
小泉　オツだよね。

と、3人が涼んでいるところへ。
木暮が、入り口から入ってくる。

3人　おー。
木暮　やっぱり、難しいみたい。
甲本　リモコン？
木暮　うん。
小泉　いいよいいよ。
曽我　僕らにはもう、これがありますからねえ。
小泉　この、冷蔵庫、もとい、クーラーが。

3人、笑う。

木暮　（怪訝そうに）何やってんの？
甲本　拾ってきたんだよ。
曽我　開けとくと、この部屋がもう、冷蔵庫になるっていう。
小泉　お前は今、冷蔵庫の中にいるから。
木暮　いや、外だし。っていうか、余計暑くなるよ？
3人　……？
甲本　どういうこと？
木暮　こうだから、冷蔵庫って、中の熱を外に出してるだけだから、開けとくと、コンプレッサーがどんどん発熱して。
甲本　あー……。
木暮　（曽我がいる、冷蔵庫の背のあたりを指して）そこはもう、断然暑いはずだよ？
曽我　……そういえば、どうも、汗が噴き出てくるな、っていう。
甲本　涼しい気持ちとは、裏腹にねえ。
木暮　気付いてんじゃん。
小泉　（冷蔵庫に頭を突っ込んで）こうしてたら、どうなの？
木暮　そうしてれば、涼しいだろうけど。そうしてるの？
小泉　……。
曽我　（気まずそうに）……閉めまーす。（冷蔵庫を閉める）

小泉、曽我をメガホンで叩く。

曽我　痛って！　（冷蔵庫を指して）これ僕じゃないでしょう。柴田さんじゃないですか。
小泉　俺はもう、涼しくなるまで、お前を叩き続けるから。
曽我　いや……！
甲本　（木暮に）何じゃあ、リモコン直んないの？
木暮　一応、修理には出してるけど、部品とかもう、ないみたい。
曽我　そんなにあれ、古いやつなんですか。
木暮　うん、渡したらちょっと、懐かしがってたもん。
曽我　なんと。
甲本　電器屋のオヤジが。
曽我　ノスタルジーを。

皆、ぐったりする。

小泉　……暑さで、死ぬ。
曽我　（冷蔵庫を指して）これ、どうします？
小泉　もういいよ。鉄のカタマリを運んだだけじゃん、俺たち。
甲本　だけど、クーラーなしって死活問題だよねえ。
曽我　どうにか、復活できないですかねえ。
木暮　あとはもうだから、自治会に頼んでみるしかないんじゃない？
3人　あー……。
曽我　新しいクーラーですか。
木暮　うん。
甲本　あいつらだって、全然動いてくれないじゃん。
3人　うんうん。
小泉　申請出しても、一切応えてくれないっていう。
曽我　レスポンス悪いですよねえ。
甲本　いるのかどうかすら、分かんないから。
木暮　大体、もぬけのカラだしねえ。
曽我　もう、あるのかどうかすら、分かんないですよねえ。
3人　うんうん。
小泉　ないんじゃない。
木暮　なくは、ないだろうけど。

そこへ、伊藤が写真を持って、暗室から出てくる。

伊藤　ちょっといい？　昨日の野球の写真、ほら。（見せる）
皆　おおっ！

皆、写真に群がり、手に取る。

木暮　もうできたの？
伊藤　とりあえず、第一弾。
曽我　野球少年どもが。
皆　（眺めて）おおー。……ん？

しかし、写真は微妙な感じ。

伊藤　微笑ましいでしょ、これとかほら。
小泉　いや、微笑ましいっていうか……。
木暮　うん……。
甲本　ヘタ……。
伊藤　は？
曽我　僕ら、こんなんじゃないですよねえ（笑）。
甲本　もうちょっとこう、躍動感あったよねえ。
皆　うんうん。
小泉　俺達の動けてる感じが、捉えられてないじゃん。
甲本　躍動感がまったくない……。
伊藤　ええ、だって、なかったもん。
小泉　ええ？
伊藤　躍動感。
皆　いやいや。
小泉　そんなことないだろう。
曽我　ありましたよねえ、充分。
甲本　もっとこう、動けてたよねえ。
伊藤　いやあの、躍動感は、なかった。
小泉　なかったってどういうことだよ。
甲本　躍動してたよ。

木暮は、気遣うように。

木暮　ああ、だからあれなんじゃない。写真が、まだあんまり……。

皆　あー。
伊藤　はあ？
小泉　それな。
木暮　こんなこと言うと、あれだけど……。
甲本　ヘタだな。
小泉　技術がない。
曽我　もっと、ローアングルから来てもらわないと。
小泉　ボケ味を生かしてね。
甲本　シズルをこう……
伊藤　いやいや、聞いて。プレーが、ヘタだったの。
皆　いやいや。
伊藤　技術がなかったの。
曽我　なんちゅう言いぐさですかそれ。
甲本　せっかく撮らせてやったのに。
小泉　っていうか、SF研で、こんだけ動ける奴らいないよ？
皆　うんうん。
伊藤　はあ……(笑)。
甲本　笑ってやんの。
曽我　(写真を見せて)これなんか僕、エラーしてますもん。
皆　あー。
小泉　これはひどい。
曽我　トンネルになってますもん、ただの。
甲本　打球の鋭さが、捉えられてないもんな。

伊藤は、皆の話を聞かず。

伊藤　とりあえず、これ今度の学内展に出すから。
皆　いやいや。
甲本　ダメだよ。
小泉　お前正気か？
伊藤　いいじゃん。
曽我　こんなの出されたら、末代までの恥ですよ。
木暮　学校の中、歩けないよねえ。
小泉　その、俺らには肖像権があるから。
皆　そうそう。
伊藤　いやいや、知らない。

そこへ、入り口の扉から、ノックの音。

甲本　……はい？

入ってきたのは、なんだか冴えない風貌の学生(田村)。

田村　(嬉しそうに)あのう、ここって、エツエフ研究会ですよねえ。

皆、目配せしあったのち。

小泉　……違います。
皆　ええ。
田村　え！？
甲本　SF研究会ではないです。
田村　いや、だって……ええ？(表の看板を見ようとする)
木暮　(すかさず)その看板、嘘なんですよ。
田村　嘘？
曽我　僕ら本当は、ボクシング部なんで。
田村　ボクシング部！？
小泉　ボクシング部です。
甲本　パンチパンチでやってるんで。
小泉　ゴングゴングで。
田村　いや……だって、……え？

曽我は、シャドーボクシングをして見せ、ロッカーを「ガン！」と殴って。

曽我　スパーリングやってく？
皆　(制して)まあまあ。
甲本　減量でこいつ、気が立ってて。
小泉　モスキート級。
田村　(戸惑って)ああ……じゃああの、すいません、失礼しました。
木暮　入りたくなったらいつでも。

田村、慌てて出ていく。

皆　(顔を見合わせて)……フィー！
小泉　ヤバイヤバイヤバイ！
甲本　今の、ヤバかったー！
曽我　もう、危険人物ですよ。
木暮　入部希望かなあ。
皆　うーん。
甲本　夏休みに。

それを見ていた伊藤は。

伊藤　かわいそうじゃん。あんな嘘ついて。
皆　いやいや。
小泉　あいつをコミュニティに入れるか？
甲本　SF研究、したがってたからねえ。
曽我　SF研究しに来る奴なんて、ロクな奴じゃないですよねえ。
伊藤　あんたらもじゃん。
甲本　いや、俺らはSF研究してないから。
曽我　もう、SFとは距離置いてますから。
甲本　読んでないし。
小泉　読んで、星新一までだよね。
甲本　いちばん面白い。
曽我　もうだって、SFが何の略かも知らないですからねえ(笑)。
皆　うんうん。
木暮　いや、それは、サイエンス・フィクションだよ。
皆　あー……。
曽我　「少し不思議」、ではなくて。
木暮　それは、藤子不二雄の解釈だから。

伊藤は、思い立って。

伊藤　じゃあ、次来たら、うちに回してよ。うまいこと言って。
皆　ああ……。
木暮　入れるの？
伊藤　部員増やしたいし。
小泉　いいじゃん、今の3人で。
伊藤　いやだって、部室欲しいから。ちゃんとした。
小泉　ああ……。

カメラクラブは、暗室だけで活動している。

曽我　(暗室のドアを指して)っていうか、なんであそこ、暗室のみなんすかねえ(笑)。
甲本　何お前、知らないの？
曽我　ええ、何ですか？
小泉　元々、カメラクラブの部室は、ここ(今いる広い部屋)だったんだよ。
曽我　え、そうなんですか！？
小泉　ここと向こう(暗室)で、カメラクラブだよ。
曽我　あー……！
伊藤　それがなんか、この人たちに取られたの。
甲本　いや、俺らじゃないけどね。
木暮　こうまあ、カメラクラブの部員が減って、僕らの上の人が来たっていう。
曽我　あー、だからここ(入り口)しか、ドアがないんですか。
伊藤　そう。

確かに、SF研を通らないと、カメラクラブの暗室へ行けない。

小泉　でないとこの構造、おかしいだろう。
曽我　ああ、ですよねえ。
甲本　思いっきり室内、通過されてるからねえ。
伊藤　しかも、このせいで余計部員が来なくなってるし。
曽我　あー。
木暮　廊下に面してないからねえ。
伊藤　悪循環。だから、次来たら、うち紹介してよ。

小泉　いやだけど、そっちが期待してるような人材は、来ないよ？
皆　うんうん。
甲本　大体今ぐらいのクオリティが来るから。
伊藤　まあ、ダメだったら、断るし。
皆　ああ……。
木暮　妥協はしないんだ。
甲本　もうじゃあ、来て、通して、戻っていくみたいな。
皆　うんうん。
曽我　ここ（戻っていくとき）気まずいですよねえ。

伊藤は、戻っていく。

小泉　おい、おい。これ（写真）。
伊藤　ああ、あげる。
皆　いやいや。
甲本　いらないよ。
小泉　持って帰れよ。
曽我　学内展、出さないでくださいよ？
甲本　ネガを燃やして。

伊藤、暗室へ。

曽我　……（改めて、写真を見て）これ、どういう写真なんですかねえ。
皆　うーん。
小泉　若干、悪意あるよな。
甲本　微笑ましさ切り取るなら、言っといて欲しかったよねえ。
木暮　だけど、あの断り方、無理あるよねえ。
皆　あー。
甲本　ボクシング部？
曽我　（自分たちを指して）華奢ですからねえ。
小泉　ボクシングの要素、ひとつもないからねえ。
曽我　じゃあもういっそ、看板を、ボクシング部にしちゃうっていう。
皆　いやいや。
木暮　それは、普通にボクシング部に入りたい人が来るから。
曽我　（気付いて）ああ！
甲本　俺ら、負けるから。
曽我　危ないですよねえ。
小泉　これは？「文化研究会」。
皆　あー（笑）。
小泉　なんか分かんないけど、文化研究会。
曽我　守備範囲、広いっすよねえ。
甲本　だけど、何やってんのかは分からないっていう。
木暮　字面はありそうだけど、
小泉　誰の心にも、引っ掛からないっていう。

そこへ、新美が洗面器を抱えて、入り口から入ってくる。

小泉　おお。

新美、無言で、イスを蹴っ飛ばす。

皆　？
曽我　どうしたんですか。

新美、スポンジタオルを投げつける。
怒っているようだ。

皆　ちょっとちょっと……。
甲本　怒ってる？
木暮　なんかあったの？

新美、「はあ」とため息をつき、座る。

小泉　だから、どうしたんだよ。
甲本　喋れよ。
新美　もうもう、お前ら、面倒くさいわ。
甲本　……は？
新美　知ってんだよ知ってんだよ。
曽我　だから、何を知ってんですか。
小泉　続きを言えよ。
新美　（激昂して）とぼけんなよ！
小泉　は？
新美　ビダルサスーン。……とっただろ？
皆　……？
甲本　ビダルサスーン？
新美　俺のビダルサスーン、お前らしかいないだろ！
皆　いやいや。
小泉　知らないよ。
甲本　何の話だよ。
曽我　ビダルサスーン、とられたんですか？

新美、立ち上がり、皆の頭を嗅いで回る。

木暮　いやちょっと……。
甲本　匂い嗅いでるけど。
曽我　僕ら、疑ってるんですか？
小泉　だから、とってないよ俺ら。

新美、分からずに座る。

甲本　それで分かんなかったのかよ。
小泉　何、どうしたの？
木暮　ビダルサスーン？
新美　（洗面器を指して）オアシスに行ったら、この中に、ビダルサスーンが入ってなかったんだよ。
小泉　うん。
新美　お前らがとったとしか考えられないだろ！
皆　いやいや。
小泉　そんなことはないだろ。
曽我　っていうか、ビダルサスーン使ってるんですか？
木暮　それすら知らないよねえ。
皆　うんうん。

新美は、なおも皆を追求する。

新美　ちょっと、出せ。
皆　いや……。
新美　出して、謝れ。
曽我　だから、どういう濡れ衣なんですかさっきから。
新美　もう、全部推理はできてんだから。
木暮　なんの推理だよ。
曽我　間違ってますから。
甲本　なんか、昨日忘れて帰ってきたとかじゃないの？
皆　うんうん。
新美　忘れ物ボックスの中には、入ってなかったんだよ。
皆　いやいや……。
小泉　だとしても、俺らはとってないから。
甲本　ビダルサスーンいらないから。
新美　じゃあ、誰がとったんだよ。
木暮　あれは？　昨日、オアシスでとられたってのは？
新美　昨日は頭洗ったんだよ。
木暮　だから、その後とかに。
甲本　こう、湯船に浸かってる間とかねえ。
皆　うんうん
小泉　その辺は、どうなの？
新美　（少し考えて）……え？
皆　いやいや。
小泉　「え」じゃないよ。
曽我　昨日帰るときには、あったんですか？
木暮　洗面器には、入れたの？

新美、しばらく考えて。

新美　……入れてない。
皆　！？
木暮　入れてないの！？

新美　（気付いて）そっか、昨日だ！
皆　うん……。
新美　昨日、オアシスでとられたんだ！
曽我　そうですよ。
甲本　なんか、ボーっとしてる間に。
新美　（悔しがる）くわーっ！

皆、じりじりと新美に詰め寄り。

小泉　ってことは、俺達じゃなかったんだな。
甲本　疑ってはいたけど……？
新美　お前らじゃなかった。
皆　うんうん。
新美　……（逸らすように）誰がとったんだよー。
皆　いやいや。
小泉　謝れよ。
皆　うん。
木暮　疑ったことを。
新美　（転嫁するように）誰かにビダルサスーン、とられたんだよ。
皆　いやいや。
小泉　謝れよ。
甲本　先に、謝れよ。
新美　（同意を求めて）悪い奴っているよなあ。
皆　いやいや。
甲本　逸らそうとすんなよ。
皆　（口々に）謝れよ。

新美は、進退窮まって。

新美　……※△□○（ごにょごにょ言う）。
小泉　ええ？
新美　ごめん、（小さい声で）あそばせ。
皆　いやいや。
木暮　ちゃんと謝れよ。
甲本　あそばせってなんだよ。
小泉　もう、いいけどさあ。

皆、仕方なく許す。
新美は、洗面器を、棚に置きながら。

新美　つまんない奴がとったんだろうな。
小泉　お前だよ、つまんないのは。
新美　俺つまんなくないよ。
甲本　確かにまあ、せこい犯行ではあるけど。
皆　うんうん……。
曽我　っていうか、なんでビダルサスーン使ってるんですか？
小泉　なんでちょっといいシャンプーなんだよ。
新美　（得意げに）あのね、ビダルサスーン使ったら、他のシャンプーは使えないよ。
皆　いやいや。
小泉　知らないけど。
新美　ほらほら（指を髪に通して見せる）。
甲本　ほらって何だよ。
木暮　普通の髪じゃん。
曽我　指通り、いいんですか。
小泉　謝れよ。

そういえば、石松はまだ帰ってきていない。

甲本　石松は？
新美　ああ、なんか先行っといてって。
曽我　うわ、またあのパターンじゃないすか。
木暮　絶対またなんか持って帰ってくるよねえ。
小泉　でかいのを。
甲本　手口がどんどん、大胆になってきてるからねえ。
皆　うーん。

新美、冷蔵庫が置いてあるのを見つけて。

新美　なに、冷蔵庫どうしたの。
皆　ああ……。
甲本　さっき、拾ってきたんだよ。
小泉　失敗に終わったけど。
新美　（なにかを思いついたようで）これね。

新美、冷蔵庫のドアを開け。

新美　（得意げに）クーラー。
皆　いやいや……。
新美　エジソンこれ、いたんじゃない？（舌を出す）
甲本　いないよ。
木暮　アインシュタインだし、それ。
曽我　（冷蔵庫を閉めながら）それすると、余計、暑くなるんですって。
新美　なんで。
木暮　開けとくと、コンプレッサーがどんどん発熱し続けて。
曽我　らしいんですよ。
新美　……信じねえ（再び開ける）。
皆　いやいや。
甲本　信じろよ（閉める）。
新美　だって、冷蔵庫だったら、涼しくなるじゃん。
甲本　だから、ならないんだよ。
曽我　汗がもう、吹き出てきますから。
新美　ちょっと、ちゃんと俺に分かるように説明しろよ。
皆　いや……。
新美　でないと、開けるよ？
甲本　こいつ、暑苦しー……。

そこへ、石松が帰ってくる。
洗面器と、薬局の前に置いてあるカエルの人形を抱えている。

石松　ういっすー！
皆　！？
甲本　（カエルを指して）お前、なんだよそれ！
石松　ケロヨン。
甲本　いや、名前じゃないよ。
小泉　お前、それはダメだろう。
曽我　角の薬局のじゃないですかそれ。
木暮　持って帰ってきたの？

石松は、カエルを置いて、それを見るように座り。

石松　こうほら、眺めてると、涼しいっていう。
皆　いや……。
小泉　涼しくないよ。
木暮　カエルで？
甲本　むしろ体温上がるよねえ。
曽我　動悸、高まりますからねえ。
石松　……（怒って）じゃあお前ら返しに行けよ！
皆　いやいや。
甲本　おかしいだろう。
小泉　お前がとってきたんだろう。

石松は、カエルの置き場所を探して。

石松　レイアウト、どうしよっか。
曽我　どこでもいいですよ別に。
甲本　っていうか、どこもやだよ。
石松　じゃあこう、番人っぽい感じで。

石松、カエルを入り口の扉の脇に置く。

曽我　……かわいい番人ですよねえ。
甲本　しかも、門の中で守ってるしねえ。
木暮　しまいに捕まるよ？
石松　あー、大丈夫。俺、テクすーごいあるから。
木暮　盗みの？

甲本　テクじゃないよ。
曽我　薬局、ショックですよねえ。

新美は、人知れず冷蔵庫を開けてみている。

小泉　（気付いて、新美に）ちょっとお前、それやめて。
新美　（拒んで）いやいや。
小泉　俺らそれ、立証済みだから。
新美　いやいや、ガリレオはそうやって殺されたから。
甲本　（うんざりして）もういいよ、気が済むまでやれば！

石松はふと、ガラクタの中に何かを見つけて。

石松　……何これ。
甲本　え？
石松　このなんか、訳わかんないの。

それは、何やら大きな板状のもの。
機械やレバー、ライトのようなものがくっついている。

皆　……？
甲本　いや、お前が持ってきたんじゃないの？
石松　なんで俺なんだよ。
曽我　違うんですか？
石松　（笑って）俺、こんなの持って帰ってこないだろ。
皆　いや……。
小泉　その、お前の盗むあれは知らないけど、違うんだ。
曽我　え、じゃあ、誰が置いたんですか？

皆、首を振る。

木暮　新美は？
新美　知らないよ。
石松　っていうかこれ、何？

皆、改めてそれに注目。

曽我　……誰かが、捨てて行ったんですかねえ。
皆　うーん。

小泉、何かに気づく。

小泉　（皆を制して）ちょっと、ちょっといい？　これね。
曽我　なんか、分かったんですか？
小泉　これ、こういうの（ライト部分）付いてるでしょ？
皆　うん……。
木暮　ライト？
小泉　でね。（持ち上げて）ちょっと、どいて。
皆　ああ……（道をあける）。
曽我　運んで。
小泉　（真ん中の床に置いて）その、まさかとは思ったんだけど、これほら。……タイムマシンじゃん。
皆　……（気付いて）ああ！
小泉　T・Mじゃんこれ！
新美　（笑って）本当だ！

それはまさしく、タイムマシンの形である。
皆、笑う。

甲本　これ、ドラえもんのあれじゃん！
皆　うんうん！
木暮　よく見るやつ。
曽我　これ、なんですかねえ。

と、皆は食いついているが。

小泉　ああ、違う違う。お前らその感じ、違う。
皆　？

小泉　言うよ？　SF研に、……タイムマシンじゃん。
皆　……（さらに気づいて）はあ！
小泉　うまいことされてんじゃん！

皆、「うわー！」となる。

石松　やられたー！
新美　馬鹿にされてる！
曽我　ちょっと、誰のいたずら？
小泉　いや、これは一本取られたよ。
石松　「ちょっと、SF研に、タイムマシン置いてやろうぜー」。
皆　ずわー！
木暮　手が込んだことを。
甲本　ちょっと、曽我。……乗って。

皆、「ひょおー！」と盛り上がる。

曽我　いや……！
石松　乗れ乗れ、お前！
甲本　リモコン壊した罰として。
小泉　俺たちを、涼しくさせて。

曽我、乗ろうとするも、ためらって。

曽我　……これ、乗っちゃダメでしょう、人として！

皆、笑う。

新美　じゃあ、乗って、のび太のマネ。
皆　ぐわー！（さらに盛り上がる）
曽我　あなた。
石松　全力で。

曽我、意を決して、乗る。

皆　おお……？
曽我　「ドラえもーん」！

皆、「うわあ……！」という空気になる。

曽我　どうですか。
甲本　思った以上だ。
石松　鳥肌立ってるもん。
曽我　やらせといて、あなたたち。

小泉は、マシンに付いているダイヤルを触り。

小泉　じゃあ、さらに涼しくなるべく、時間を合わせてみたりして。
皆　うほー！（盛り上がる）
曽我　やめてくださいよちょっとー！
小泉　えー、一日前に（合わせ終わる）。
木暮　よくできてるよねえ。

新美は、曽我の手をとって。

新美　じゃあじゃあ、レバーに、手をかけてみたりして（曽我の手をレバーに）。
皆　ぐわー！（盛り上がる）
曽我　この手もう、戻せないでしょう。
石松　お前、どこまでもいくなあ。
甲本　リーチかかってるもんねえ。
小泉　うわあもう、見たくない。

曽我は、皆に期待に応えて。

曽我　じゃあ、お望み通り。このレバーを、引いてみたりして……！

曽我、ひと思いに、レバーをぐいっと引く。
その瞬間、時空間が歪むような、光と音。

皆　！？

煙とともに、タイムマシンと曽我が消えている。

小泉　……え？
石松　……何これ。
甲本　曽我？
木暮　消えた、よねえ。
新美　これは……？

皆、顔を見合わせて。

皆　……いやいや！
小泉　そんなことはないよ。
甲本　あるわけないよねえ。
木暮　それは、違う。
新美　もうだって、アニメだし。
皆　うんうん。
石松　（思わず）タイムスリ……。
皆　いやいや。
小泉　（思わず）タイムトラ……。
皆　いやいや。

しばしの間、ののち。
皆、いっせいに曽我を探す。

甲本　ちょっと曽我ー。
小泉　曽我？
木暮　どっか行ったのかなあ。
甲本　逃げてったんじゃない？
皆　あー。
甲本　耐え切れなくなって。
小泉　あいつ、すばしっこいからね。
石松　曽我ー（部屋を出て行く）。

柴田、暗室から出てくる。

柴田　どうしたの？
甲本　曽我、そっち行ってない？
柴田　ええ？
木暮　どっか行っちゃって。
柴田　来てないけど。
甲本　どこいったんだよ。
石松　（部屋に入ってきて）曽我ー。

そこへ再び、時空間が歪むような、光と音。
煙とともに、タイムマシンに乗って、曽我が現れる。

皆　おお……！
柴田　（驚いて）え、え、何？　今の、どういうこと！？
新美　曽我。
木暮　出てきた。

曽我は、周りを見渡し、怯えている。

甲本　お前……、どこ行ってたんだよ。
皆　うん。
曽我　……今ってこれ、今日ですか？
小泉　ええ？
曽我　今日はこれ、昨日じゃないですか？
甲本　混乱してる。
皆　うんうん。
曽我　今日、いつですか！？
小泉　だから、どういう質問だよ。
木暮　今日は、今日だよ。

曽我、大きくため息をつきながら、マシンから降りる。

甲本　だからどうしたんだよ！
曽我　……昨日ですよ。
木暮　ええ？
曽我　昨日に、行ってきたんですよ、このタイムマシンで！
木暮　昨日？

伊藤も、何事かと、暗室から出てくる。

曽我　こうだから、ふざけてたら、「グニャ」でもう、昨日ですよ。
皆　いやいや。
甲本　分かんないよ。
小泉　グニャ？
曽我　（木暮に）ちょっと、通訳してください。
木暮　いやだから、僕もわかんないよ。
曽我　グニャなんですよもう、全てが！
皆　いやいや……。
甲本　落ち着けよ。

伊藤は、状況が分からず。

伊藤　（柴田に）どうしたの？
柴田　私もまだ、掴めてない。

曽我は改めて、起こったことを説明。

曽我　こうだから、レバーを引いたら、周りがグニャって歪んで、そしたらみんな消えちゃったわけですよ。
甲本　消えた？
曽我　こう、僕を残して。
木暮　ここで、ってこと？
曽我　で、なんかもう分かんなくて、パニクってもう、外に探しに行ったんですよ。そしたらもう、グラウンドで野球ですよ。
皆　いやいや……。
甲本　だから分かんないよ。
木暮　野球？
曽我　野球を、してたんですよ僕らが。こう、躍動感なくて。エラーとかしてて僕が。
木暮　（理解して）昨日の僕らを、見たってこと？
曽我　そういうことです！

皆、どよめく。

新美　昨日の俺たちが、野球してたの？
曽我　そうですよ、昨日の格好で。で、もうだから気持ち悪くなって、ここに帰ってきて、これにこう、もう1回乗り込んだんですよ。で、1日後にダイヤル合わせて、レバーを引いたら、またグニャで、今ですよ。

皆、戸惑う。

甲本　……お前それ、嘘じゃないよねえ。
曽我　本当ですよ。
石松　嘘だったら、殴るよ？
曽我　乗ってみてくださいよじゃあ。

伊藤は、さっき置いていった写真を見て。

伊藤　（気付いて）これ！　ほら、ここ！

皆、写真に群がる。

伊藤　（写真を指して）この、フェンスの後ろ。
石松　（見て）……あ！
伊藤　これって、曽我君だよねえ。
甲本　本当だ！
新美　曽我が2人いる！

皆、どよめく。

柴田　どこ？
伊藤　（写真を指して）これ。
柴田　……（気付いて）本当だ！
小泉　お前、2人写ってんじゃん！
曽我　そうですよ。これ、さっきの僕ですよ。
柴田　これ、どういうこと？
曽我　こうだから、エラーしてる僕を、見てる僕ですよ。撮られたんですよさっき。
伊藤　私に？
木暮　昨日に行って、撮られたってこと？
曽我　そうですよ。もうだって、（今と）おんなじ服ですもんこれ。

写真には、曽我が2人写っている。

皆　うわー！
小泉　本当だ！
曽我　動かぬ証拠ですよ、これ。
柴田　昨日に行ってきたってこと？
曽我　野球してましたから。
甲本　（写真の中の曽我が）見てるからねえ。
新美　ってことは……？

皆、タイムマシンを見る。

小泉　……これ、マジタイムマシンじゃん！

皆、「うおおおお！」と興奮。

新美　すげえ！
甲本　何なに、これ！
小泉　モノホンじゃん！
石松　タイムスリップできんの？
曽我　グニャってなるんですよこれ。
木暮　本物！？
小泉　（レバーを指して）これだから、このレバーで、タイムスリップするわけだよ。

皆、「おおー！」と、盛り上がる。

柴田　どうやって手に入れたの？
曽我　なんかいつのまにかこう、置いてあったんですよ。
柴田　タイムマシンが？
新美　（ダイヤルを指して）これでこう、いつに行くか選べるんだよ。
皆　はー！（感心する）
小泉　マジで？
石松　ダイヤルを合わせて。
木暮　時間移動できると。
甲本　マジ、タイムマシン。
曽我　マジタイムマシンですよ。

皆、改めて驚き、やがて笑う。

小泉　もうなんか、分かんないよね。
皆　うんうん。
甲本　分かんない分かんない。
新美　もう俺、夢だと思ってるもん。
石松　俺も。
木暮　そういう処理になるよねえ。

伊藤は、写真を指して。

伊藤　これってじゃあ、昨日もう、来てたってこと？
曽我　（考えて）……そう、いうことですよ、だから。
木暮　昨日すでに、いたってことか。
曽我　昨日の野球を、見てたんですよ。今日の僕が。
新美　（想像して）……気持ち悪りー！
甲本　お前、2人いたのかよ！
石松　全っ然、気付かなかった。
曽我　もうだってみんな、野球に夢中でしたもん。
柴田　（考えて）そっか、結果の方が、先に来るんだ。
木暮　そう、いうことだよね。
曽我　先に来てから、後から行くわけですよ。
小泉　……なんか、逆だよね。
甲本　因果関係が。
新美　（曽我に）っていうかお前、タイムトラベラーじゃん。

皆、笑う。

曽我　タイムトラベラーですか、僕。
石松　ウォーリーじゃん。
曽我　図らずも！
甲本　やったなあ、お前。
新美　タイムトラベルしてんなよ。

皆、笑う。

曽我　いや、したくてしたんじゃないですもん。
柴田　タイムトラベルって、できるもんなんだ。
小泉　もう、途轍もないよね。
木暮　（素朴に思いついて）誰のなんだろう。
皆　……？
木暮　これ。

小泉、木暮をピコピコハンマーで「ピコッ」と叩いて。

小泉　分かるかよ。

皆、笑う。

木暮　いや……。
新美　タイムマシンの持ち主なんて、分かるかよ。
甲本　存在すること自体、分かんないもんねえ。
皆　うんうん。
曽我　ひみつ道具ですからねえ。
柴田　ドラえもんじゃない？　こう、未来から。
皆　おお？
小泉　……Dが？
石松　未来から、Dが？

皆、笑う。

甲本　Dがこう、乗ってきたのかな。
小泉　TMに乗ってね。
新美　DYを食べながら。
木暮　なんでイニシャルトークなの？
曽我　分かりにくいですよ。

そこへ、カメラクラブの照屋が、入ってきていた。
照屋は、青いシャツを着ている。

伊藤　（気付いて）照屋さん！

皆、ドキッとする。

照屋　どうしたの？
曽我　一瞬、Dかと思いましたよねえ。
皆　うんうん。
照屋　Dって何。
甲本　でかいDかと思ったよねえ。
木暮　初期の頃の。
柴田　照屋さん、聞いて下さい。これ、タイムマシンなんです。
照屋　ええ？
曽我　時間移動できちゃうんですよ。
柴田　信じられないでしょうけど、

すると照屋は、タイムマシンを見るや、興奮して。

照屋　タイムマシン！　これだよこれ！　僕言ったじゃん、見たって！
伊藤　ええ？
照屋　これあれだよ、デジャヴだよ。僕昨日、言ってたもんねえ。
石松　昨日？
照屋　言ってたじゃん！　デジャヴっていうか、予知だわ。完全にこれだったもん。はー！（感心する）
甲本　どうしたんですか？

皆は、口々に照屋に説明。

伊藤　しかもそれ、本物なんですよ。
柴田　マジタイムマシン。
新美　さっきこいつ、昨日に行ってきたんですよ。
小泉　昨日の自分を見てきたんです。
曽我　グニャってなって。
照屋　……そうやって僕を、担いでるんじゃないよねえ？
皆　いやいや。
柴田　違います。
甲本　マジで本物なんですよ。
照屋　今日、僕の誕生日じゃないよねえ？
皆　いやいや。
曽我　だから違いますよ。
木暮　それは、自分で分かるでしょう。
甲本　ドッキリとかじゃないですから。

伊藤は、照屋に写真を見せて。

伊藤　これほら。昨日の曽我君の向こうに、今日の曽我君。
照屋　（見て）……ほお、ほお、ほお！
曽我　さっき撮られたんですよ、昨日で。
甲本　これがだから、タイムトラベルした証拠なんですよ。
柴田　ほら、今と同じ服でしょう。
伊藤　曽我君が、昨日の自分を見て、驚いてるっていう。
照屋　こう、「俺はなんて駄目なんだ」と。
曽我　いや、思ってないですよ。恐れおののいてるんですよ。
照屋　（感心して）はあー！

石松たちは、改めてタイムマシンを眺めて。

石松　いやだけど、ヤバイよねえ。
新美　タイムマシンが、手に入ったから。
小泉　もう、無敵だよね。

木暮、タイムマシンのエンジン部分を覗く。

柴田　（木暮に）分かるの？
木暮　いや、分かんないけど。こんなエンジン見たことないからねえ。

皆、同じように覗いてみる。

皆　あー。
石松　それっぽい。
新美　タイムマシンっぽい。
伊藤　はあー。
柴田　シブい。

小泉は、黒板の前に立って。

小泉　っていうかさあ、……いつに行く？
皆　おおっ！？
柴田　使うの？
小泉　タイムマシンを用いて、いつに行く？
新美　（仕切って）タイムマシンで、いつに行くかの、会議！

皆、「よおっ！」と、会議の形になる。

曽我　（制するように）いやだけど、気をつけた方がいいですよこれ。
甲本　え？
曽我　乗ると、グニャって体が裏返る感じなんですよ。それが相当、気持ち悪いですから。
皆　……（シラッとなる）。

小泉、曽我を叩く。

曽我　痛って。
新美　気になるかよ、そんなの。

皆、笑う。

小泉　今言うことじゃないだろ。
曽我　いや、本当にもう、ヤバイですから。
甲本　お前が乗り物に弱いだけだよ。
小泉　お前、電車で酔うじゃん。
石松　キックボードで酔うじゃん。
曽我　酔わないですよ。

そして伊藤は、提案する。

伊藤　じゃあ、これは？　未来に行って、未来の自分たちを見てくるっていう。
皆　うーん……！
小泉　それな。
甲本　それちょっと、怖いな。
皆　うんうん。
石松　未来は怖いよ。
小泉　もうだって、何年後かに行って、もし自分が死んでたりしたら、もう。
皆　うわー。
甲本　オチが分かっちゃうっていう。
石松　そのショックで死ぬよね。
木暮　心を病んで。
甲本　何年後かに。
小泉　それでうまく、辻褄が合っちゃうみたいな。
皆　うんうん。
石松　いや、未来はやばい。
小泉　っていうか、過去だよね。
皆　うんうん。
新美　タイムトラベルといえば、過去じゃない？
照屋　結局まあ、未来は自分で切り開くもんだからね。

皆、「うーん」と、照屋の言葉を噛みしめる。

曽我　……いや、なんの感じなんですか。
柴田　（木暮に）これって、いっくらでも行けんの？
木暮　一応、99年が最大みたいだけど、でも、繰り返して使えば。
柴田　おー。
甲本　こう、どんどん遡っていく感じで。
新美　じゃあ、無制限じゃん。

皆、「おおーっ」と、盛り上がる。

小泉　じゃあ、これは？　恐竜時代。
皆　あー。
石松　ジュラ紀？
小泉　ジュラ紀。
柴田　王道だよね。
小泉　ジュラ紀に行って、恐竜と遊ぶみたいな。
新美　恐竜の背中ですべり台みたいな。
伊藤　やりたい！
曽我　いや、そんな、なつかないでしょう。
木暮　っていうか、いきなり行きすぎじゃない？
皆　ああ……。
木暮　さすがに、何万年前とかだから。
甲本　そっか、一回で99年だから。

柴田も、思いついて。

柴田　じゃあ、第二次世界大戦が起こるのを、阻止する。
皆　いやいや……。
甲本　どうやってだよ。
柴田　原因となる、ある一点を突き止めて、
小泉　突き止められないだろう。
曽我　諸事情、絡んでるでしょうから。
柴田　あー……。
木暮　止めたら止めたで、だいぶ世の中変わるだろうし。
曽我　ここは別の世界ですよね。
小泉　あり得べきな。

石松も、提案。

石松　これどう？　だいぶ昔に行って、パンゲア大陸が分かれるのを、くい止めるっていう。
皆　いやいや……。
甲本　できないだろう。
曽我　長い年月かかってますからあれ。
木暮　っていうか、なんでみんな、話のスケールが大きいの？
曽我　別になんだってできる機械じゃないですから。
木暮　タイムスリップできるだけだから。

新美は、意気揚々と。

新美　じゃあ、一休さんって、実在しなかったんだよね。だから、渡っちゃいけない橋を、
伊藤　いや、するんじゃない？
柴田　したよねえ。
新美　おお……（戻る）。
甲本　……何なんだよ。
曽我　どうしようとしたんですか。
新美　うるさいよ。

照屋、おずおずと。

照屋　僕さあ、中三の夏に戻って、もう一度やり直したいんだけど。
皆　いやいや。
曽我　そういう機械じゃないですから。
甲本　中三の自分に戻れるとかじゃないですから。
柴田　今のままで戻るだけですよ。

照屋、無念な感じで、座る。

曽我　何があったんですか、中三の夏に。

そして甲本が提案。

甲本　だからさあ、結局やっぱ、江戸時代とかじゃない？
皆　あー。
新美　ちょんまげで。
甲本　こうほら、タイムトラベルといえば、
石松　（遮って）あーでも、それだったら、飛鳥時代とかの方が渋いって。
甲本　いやでも遠いから。
石松　いやだけど、江戸時代なんて、テレビでやってるじゃん。
甲本　いや、違う違う。
石松　飛鳥時代は……
甲本　飛鳥時代はだって、つまんないじゃん。

石松、カッとなり、甲本を叩く。

甲本　（怒って）お前……！

石松と甲本、取っ組み合いになる。
「江戸時代！」「飛鳥時代！」と言いながら。
皆、慌てて仲裁する。

曽我　これ、なんの取っ組み合いなんですか。
小泉　江戸と飛鳥で、お前。
石松　こいつが江戸江戸言うからだよ。
甲本　飛鳥、なんだ飛鳥ってお前！（また揉める）
木暮　どっちでもいいだろ別に。
小泉　どっちも素晴らしいだろう！

そして、柴田はふと思う。

柴田　……だけど、これって本当に、戻って来れんのかな。
伊藤　ああ。
柴田　だって、まだ一回、昨日に行っただけだし、
伊藤　確かにちょっと、怖いかも。こうなんか、戻って来れなくなったりして。
柴田　そうそう。
照屋　そうなったら、向こうでの暮らしになるからねえ。
曽我　厳しいっすよ、現代っ子には。

それを聞いて、一同は。

新美　……昨日で！
皆　うん！
小泉　まあ、もう一回ね。
石松　とりあえず、一日前で。
照屋　露骨に近過去になったねえ。
甲本　（窓の外を指して）それか、一回ケチャに行かせてみる？
皆　いやいや……。
小泉　戻って来れないだろ。
木暮　犬だから。
甲本　そっか。
曽我　僕が行ったあとに、動物実験やめてくださいよ。

そして石松、思いつく。

石松　これってさあ、今とおんなじ時間に着くってこと？
皆　ああ……。
木暮　ってことじゃないかなあ。
曽我　多分だから、そういうことですよ。
甲本　野球やってたのが今ぐらいだったからねえ。
曽我　ええ。
木暮　時刻のダイヤルとかもないし。
石松　ってことは。これすごいよ。昨日に行って、壊れる前のリモコンを持って帰ってくるっていう。
皆　おおー！
甲本　なるほど！
小泉　お前、ひらめいたなあ！
石松　俺、こういうことひらめくのよ。
甲本　この時間ならまだ壊れてないし。
柴田　コーラをこぼす前のリモコンが、手に入るんだ。

皆、「はあー！」と、感心する。

小泉　もうすでに、タイムマシンを使いこなしてるよね。
新美　OK、決まり！
甲本　もう一回昨日に行って、リモコンを取ってくると。
皆　うんうん。
小泉　そして、クーラーを復活させると！
皆　うんうん！
石松　行きたい人！

SF研の、曽我以外の5人、手を挙げる。

木暮　……まあ、こうなるか。
皆　うん。
小泉　（カメラクラブの3人に）あなた方は？
伊藤　一旦、見たいし。
柴田　そうそう。
曽我　僕はもう、こりごりですから。
小泉　ああ……。
石松　とりあえず一旦、乗ってみよっか。

皆　おお。

5人、タイムマシンに群がる。

曽我　いや、5人で乗るんですか？
柴田　小さくない？
小泉　とりあえずじゃあこう、片足ずつ。
皆　はいはい。

5人、タイムマシンに片足を乗せる。

甲本　……これ、乗れてないよねえ。
木暮　タイムマシンだけ、行く感じだよねえ。
小泉　っていうか、片足だけ行く感じだよねえ。
新美　切断されて。
甲本　メチャクチャ恐いよねえ。

皆、慌てて足をどける。

伊藤　じゃあもう、無理やり乗れば？
皆　ああ……。
伊藤　こう、スクラムみたいに。

5人、無理やり乗ろうとする。

甲本　（押し合い）これで……？
木暮　（へし合い）こういうこと？

皆、やがて離れる。

新美　……暑いよ。
小泉　暑いよね。
甲本　クーラーまだないから。
曽我　人数減らせばいいじゃないですか。
石松　いやでも、これは絶対5人で乗れるはずなんだよ。
小泉　ドラえもん達は、5人で乗れてるから。
木暮　それを基準にしていいの？
曽我　マンガじゃないですかあれ。
新美　いやでも、マンガのひみつ道具だから。
曽我　あんたたち、小学生じゃないでしょう。

照屋は、提案する。

照屋　じゃあこう、一人がそのへりに掴まればいいんじゃないかな。
木暮　ええ？
照屋　こう、スネ夫みたいに（タイムマシンのへりに手で掴まるように）。
甲本　いやだから、ドラえもんは参考にならないですから。
曽我　確かによく、こうなってますけど。
木暮　そいつ、危ないでしょう。

柴田も思いついて。

柴田　じゃあこう、扇みたいになるっていうのは？　こう、一点でこうやって、
木暮　おかしいだろう。
曽我　それなんのタイムスリップなんですか。

柴田、小泉に「シッ」とやられて、戻る。

甲本　OK、わかった。ジャンケンで決めよう。
木暮　おお。
甲本　ジャンケン3回勝負で、……（ジャンケンの姿勢に）
小泉　いやいや、そんなんいいから。
石松　俺ら行ってくるわ。

小泉・石松・新美は、すでに乗っている。

甲本　おい！
木暮　なんでだよ！
新美　（制して）もうもう、いいじゃん。順番に行けばいいじゃん。
3人　そうそう。

甲本、無理やり乗り込もうとするが、3人は拒む。

3人　もうもう……。
石松　壊れるから。
小泉　ここで壊れたら、それこそ寓話だから。

甲本、さらにグイっと乗ろうとするも。

3人　ああ、もうもう。
新美　痛い痛い。

甲本はもう乗れなさそうなので。

甲本　……お前ら帰ってくるとこに、イス置いといてやるからな。
皆　……（考えて、リアクション）！
小泉　それはやめろよ。
木暮　融合するから。
新美　イスと、ややこしいことになるだろ。

曽我はここで、懸念して。

曽我　いやだけど、ここ（部屋）からは行かないほうがいいですよねえ。
小泉　ええ？
曽我　いやだって、僕らがもう、部室にいるかもしれないじゃないですか。
小泉　……ああ！
甲本　そっか、野球から帰ってきて。
曽我　だからほら。鉢合わせしたら、大混乱ですよ。

皆、「確かに！」となる。

小泉　ホントだ、やばい。
甲本　発狂するかもしれないよねえ。
皆　うんうん。
伊藤　（窓を指して）じゃあ、外でやれば。
皆　あー。
伊藤　誰にも見られないし。
小泉　じゃあ、庭でね。

3人、タイムマシンを庭に運び出す。

木暮　空間移動は、できないのか。
曽我　ここ、スマートじゃないっすよね。
小泉　（皆に）リモコンをかすめとってくるから。
甲本　すぐ戻ってこいよ？
新美　大丈夫だよ。

3人、タイムマシンとともに、窓の外へ。

伊藤　（柴田に）どういう感じになんの？
柴田　なんかこう、スパークする感じ。
小泉　（庭に立ち、窓からこっちへ敬礼）行ってまいります。

3人、窓の外でしゃがみ、タイムマシンに乗ったもよう。
残る一同は、タイムスリップを見届けようと、窓の周りに集まるも。

新美　（声）……いやお前が行けよ。
小泉　（声）ああ、俺が先頭ね。
石松　（声）俺これ合ってるよね？
小泉　（声）一日前ってこれ、合ってんのかな？
新美　（声）じゃないの？
石松　（声）過去のほうだよ。
小泉　（声）分かってるよ。

見守っている一同、ジリジリしている。

新美　(声)ちょっと、そんなにくっつくなよお前。
石松　(声)俺？
新美　(声)暑いよ。
石松　(声)だってお前、こうしないとレバー引けないじゃん。
新美　(声)そんなことないよ。

甲本は、少ししびれを切らせて。

甲本　ちょっと、早く行けよ。

しかし、3人はなかなか行かない。

小泉　(声)ちょっと待って、すごい、態勢が悪い俺。
新美　(声)動くなよだから。
石松　(声)俺これ、乗れてるよねえ。
小泉　(声)その、エンジンと、ひざの関係が。
新美　(声)ケチャ、お前くるとクチャクチャになるから。
石松　(声)俺マジで乗れてる？
新美　(声)ケチャ、お前ちょっと(笑)。
曽我　(イライラして)だから何をやってるんですか！
甲本　行けよ早く！
石松　(声)行くよー。
小泉　(声)待って、ちょっと吊りそう。お前持つなよ。
新美　(声)ケチャが、乗ってこようとすんだよ。
石松　(声)よっ。

石松がレバーを引いたらしく。
窓の外から、タイムスリップの光と音。

伊藤　(見て)消えた！
柴田　今、タイムスリップしたんだ！
曽我　もう今、グニャで昨日ですよ。
甲本　やっと行ったねえ。
木暮　最後までごちゃごちゃしてたけど。
照屋　いやいや、これはいいもん見たねえ。

窓の外では、ケチャがおののいているようで。

曽我　ケチャがほら、びっくりしてますよ(笑)。
甲本　ケチャ、タイムスリップしかけたからねえ。
木暮　犬で初めて。
伊藤　これってまた、ここ(庭)に出てくんの？
甲本　光とともに現れるから。
柴田　(ケチャに)ケチャ、危ないよ。
伊藤　(ケチャに)こっち。
照屋　(ケチャに)犬人間みたいになるよ。
柴田　(ケチャに)そうそうそう。

と、一同、3人の帰りを待ち続けるも。

木暮　……帰ってこないねえ。
皆　うんうん。
曽我　あれですかねえ、昨日の僕らがもう、(部屋の中に)いるんですかねえ。
皆　あー。
甲本　様子をうかがってんのかなあ。
伊藤　(考えて)ってことは、昨日、もう来てたってこと？
曽我　そう、いうことですよねえ。
皆　うんうん。
柴田　そっか、そうなるんだ。
木暮　窓の外に、いたってことか。
曽我　……気持ち悪いですよねえ！
皆　うんうん。
甲本　様子をうかがわれてたのかなあ。
伊藤　あの3人に。
木暮　全然、気付かなかったよねえ。
曽我　(思い出して)そういえば僕、叩かれたような……。
木暮　ええ？

その時、入り口からまた、ノックの音。

木暮　……はい。

入ってきたのは、さっきの冴えない学生(田村)。
皆、「うわあ……」となる。

田村　……あのー。ここってやっぱり、エツエフ研究会じゃないですか。
木暮　ああ……。
田村　色々聞いて回りまして。
甲本　(断ろうと)ごめん、今それどころじゃないから。
皆　うんうん。
曽我　部外者は、お断りしてるんですよ。
田村　いやあの、部外者じゃないんですけど。

すると照屋が、親しげに。

照屋　(田村に)なに、また来たの。
田村　ああ……。
甲本　知り合いなんですか？
照屋　石松君のいとこなんだよ。
甲本　石松の？
照屋　会ったことない？
曽我　そうだったんですか！？
照屋　夏休みを利用して、遊びに来てんのよ。
曽我　ああー。
伊藤　そうだったんだ。

照屋、田村に握手を求めるも。

田村　いえ、違いますよ。
照屋　え？
甲本　……違うじゃないですか。
照屋　(田村に)いやだって、昨日そう言ってたじゃん。
田村　っていうか、会ったことないですし。
木暮　初対面なんですか！？
照屋　(戸惑って)いやいやそんなことないよ。昨日あんだけ喋ったじゃん。
曽我　誰と、勘違いしてるんですか。
照屋　……(皆に)今日、僕の誕生日じゃないよねえ？
皆　いやいや。
木暮　それはだから、自分で分かるでしょう。
柴田　(田村に)じゃあ、いとこでもなんでもないの？
田村　ええ。だってそもそも時代が違いますし。
照屋　いやいや、だって喋ったんだよ。語りを聞いてくれて、……

皆は、ギクッとする。

甲本　ちょっと待って下さい。
木暮　(田村に)今の、どういう意味？
柴田　時代が、違う？
田村　……(しまったという風に)あ。
皆　いやいや。
甲本　「あ」じゃないよ。
田村　(嬉しそうに)聞こえちゃいました？
曽我　君だって、言ったから。
木暮　聞こえよがしに。
柴田　どういうこと？
伊藤　時代が違う？
田村　ええまあ、年代っていうか。

皆、心がざわめきつつ。

甲本　……君、何？
皆　うん。

田村は、満を持して。

田村　えー、これちょっと、びっくりしないで聞いてほしいんですけど、

皆　うんうん。
田村　ああでも、ノーリアクションっていうのも、辛いんですけど。
甲本　だからなんだよ。
曽我　言って早く。
田村　（ガラクタのあたりを見て）？　あの、ここになんか、板みたいな、こう……。
木暮　タイムマシン！
田村　ああ、知ってるんですか。
皆　うん。
田村　（感心して）さすがですねえー。
皆　いやいや。
甲本　だから言えよ先を。
曽我　その先が聞きたい。
田村　……僕、実は、タイムマシンに乗ってきたんですよ。未来から。
照屋　未来！？
柴田　タイムスリップしてきたの！？
田村　ええ、そうです。

皆、どよめく。

伊藤　いつの未来から？
田村　西暦、2028 年から。
曽我　2028！？
甲本　……まあ、そこまで未来でもないけど。
木暮　25 年後だけど、
柴田　ええじゃあ、25 年後の、人なの？
田村　ええ。僕だから、2028 年の、エツエフ研究会の部員なんですよ！

皆、「！？」と驚く。

甲本　マジで！？
曽我　SF研！？
木暮　25 年後の。
田村　そうです。
曽我　僕らのじゃあ、後輩ってこと？
田村　（挨拶）お疲れ様です！
皆　いやいや。
甲本　わかんないわかんない。
木暮　挨拶されても。
柴田　ってことは、未来人なんだ。
田村　（照れて）わ、そっか、そういうことになっちゃいますね！
照屋　いやいや、照れてるけど。
曽我　未来人！？
伊藤　あのじゃあ、タイムマシン、あなたが置いてったの？
田村　ええ。着いたら、誰もいなかったんで。
木暮　ここに乗ってきたってこと？
田村　ええ。2028 年の、この部室から。
木暮　ああ……。
柴田　25 年後もここなんだ。
田村　ええ。

甲本は、改めて聞く。

甲本　っていうか、タイムマシンは、なんなの？
皆　うんうん。
木暮　未来には普通にあるの？
田村　いやだから、作ったんですよ。
曽我　作った！？
田村　エツエフ研の、みんなで。
木暮　タイムマシンを？
田村　こう、設計図を見ながら。

皆、どよめく。

曽我　どういう科学力それ。
柴田　タイムマシン、作れちゃうんだ。
甲本　っていうか、本当にSF研究してんのかよ。
曽我　活動方針、変わってますよねえ。
田村　いやいやだから、皆さんが書いたんですよねえ。
曽我　え？
田村　タイムマシンの、設計図。
皆　……いやいや。
甲本　書いてないよ。
木暮　なんの話？
田村　……違うんですか？
曽我　いやだって、書けないから。
甲本　タイムマシン、書けないよねえ。
田村　いやだって、日付が今日になってましたよ。
木暮　今日？
田村　設計図の。それで僕、ここへ来たんですから。（照屋に）書いてないですか？
照屋　僕は……（考えて）書いてないかなあ。
皆　いやいや。
木暮　考えなくてもわかるでしょう。
曽我　あなた、書けないでしょう。
柴田　じゃあ、設計したわけじゃないんだ。
田村　（かぶりを振って）いやいやだって、タイムマシンの設計なんて無理ですよー。
皆　いやあ……。
木暮　僕らもまあ、無理だけど。
甲本　おんなじように無理だよねえ。

田村は、置いてある冷蔵庫を見つけて。

田村　あっ、それです。その冷蔵庫の中に、設計図が入ってたんですよ。
木暮　これに？
田村　こう、部屋を大掃除してたら、この冷蔵庫が出てきたんですよ。で、開けると、この中に設計図が入ってて。
伊藤　で、作ったんだ。
田村　ええ。みんなでこう、「これは！」ってことになって。

皆、戸惑う。

曽我　……もう、全然分かんないですよねえ。
皆　うんうん。
甲本　とりあえず、俺らはこれ（冷蔵庫）を捨てに行かないんだっていう。
曽我　それだけですよね。
木暮　もっとじゃあ、後の人とかかなあ。
曽我　そういうなんか、黄金期が来るんですかねえ。
甲本　SF研の。
伊藤　（田村に）じゃあ、今日に来たのも、それだったんだ。
田村　ええこう、ルーツを探りに来たんですけど、違ったみたいですねえ。
照屋　黄金期では全くないからねえ。
曽我　ほっといてくださいよそれは。
柴田　でもそれで、タイムマシンができちゃったんだもんね。
伊藤　うーん。

田村は、部屋を見渡して。

田村　で、どこにあるんですか？
曽我　え？
田村　タイムマシン。
曽我　ああ……。
甲本　（言い訳するように）いや、それがほら、知らなかったからさあ。
木暮　ちょっと今、使ってみてるっていうか。
甲本　昨日に行ってるっていう。
田村　ああ、じゃあ誰かが乗ってるんですか。
甲本　うん。
曽我　（庭を見て）いやだけど、遅いですよねえ。
木暮　もう帰ってきてもいいころだよねえ。

しかし田村は、のんびり構えていて。

田村　ああ、いいですよ全然。別に急いでるわけでもないですし。
皆　？
柴田　だけど、みんな待ってるんでしょう。

田村　(笑って)いやだって、タイムマシンですから。
柴田　ええ？
田村　いつでも好きな時間に帰れますから。
木暮　いやだけど、時刻のダイヤルはなかったよねえ。
皆　うん。
柴田　なんかやり方があんの？

　　すると田村、ドキッとして。

田村　付いてないんですか？　時刻のダイヤル。
皆　いや……。
木暮　知らないの？
曽我　なかったですよねえ。
田村　(驚いて)ああ、そうなんですかー。
皆　いやいや。
甲本　君なに、あんまり詳しくないの？
田村　いやだって僕、パイロットですし。
曽我　そういう問題じゃないでしょうそれ。
甲本　ですしって。
木暮　パイロットだからこそだよねえ。
柴田　一日が、最小単位っぽかったよ。
田村　あー、じゃあみんな、待ってるかもしれないですねえ。
照屋　待ってるよ。
甲本　全然帰ってこないわけだからねえ。
田村　ああ……。

　　と、田村が少し、ソワソワしだしたので。

伊藤　とりあえずじゃあ、ここで待ってたら。
田村　ああ、じゃあそうさせてもらっていいですか。
木暮　どうせすぐ戻ってくるし。
田村　じゃあ、お言葉に甘えて。
曽我　……どういう未来人なんですかねえ。

　　田村、座る。

柴田　だけど、未来人なんだ。
伊藤　全然、っぽくないよねえ。
曽我　もっさりしてますよねえ。
照屋　(足元を指して)ビーサン履いてるしねえ。
田村　ところがどっこい、未来人なんですよ。
照屋　ああ……。
甲本　もうだって、言葉が古いもんねえ。
曽我　どっこいは、言ったことない。
木暮　僕らですら。
伊藤　(田村に)名前、何ていうの？
田村　ああ、田村です。
照屋　田村君。
田村　(説明)田は、あの田じゃないですか。で、あの木へんの村で。
甲本　いや、それしかないだろ。
曽我　っていうかもう、昭和の苗字ですよねえ。
柴田　田村君っていうんだ。

　　田村は、部屋を見回して。

田村　いやだけど、新しいですよねえ。
皆　！？
甲本　ああそっか、今より古いんだ。
田村　だって、25 年後ですし。
木暮　建て替えとかも、されてないの？
田村　もう、自治会が全然、動いてくれないんですよ。
皆　ああ……。
曽我　あれ、いつまで動かないんですかねえ。
甲本　25 年間動いてないからねえ。
田村　(思いついて)そうだあの、ずっと気になってたんですけど、エツエフって、どういう意味なんですか？
曽我　(戸惑って)エツエフ？
柴田　エスエフじゃなくて？
田村　ああ！　……エスエフなんですか！

　　皆、驚く。

木暮　名前、変わってるってこと？
曽我　エツエフ！？
田村　いやもう、僕が入ったときには、すっかりエツエフ研になってたんで。
甲本　なんだよエツエフって。
田村　だから、意味わかんなかったんですよ。(見渡して)あー、だからいっぱい、SFの本があったんですか。
曽我　堕落してますねえー。
柴田　今よりさらにレベル下がってんじゃん。
甲本　舌ったらずだと思って、あんまり触れなかったけどねえ。
曽我　いつしか、意味を失っていったんですかねえ。

　　照屋は、田村に聞く。

照屋　25 年後の世の中って、どういう感じなの？
曽我　いや、それ聞いちゃうんですか？
甲本　さっき、未来は切り拓くとか言ってたじゃないですか。
照屋　ああ……。
伊藤　じゃあさあ、この大学の周りとかって、どういう感じなの？
皆　あー。
柴田　それぐらいなら、聞きたいかも。
甲本　限定的に。
伊藤　こう、駅前あたりとか。
曽我　メトロポリスが……？
田村　この時代って、駅の斜め向かいに、映画館があるじゃないですか。
皆　うんうん。
田村　あれが、2028 年だと、……コンビニになってるんですよ。
皆　おおー。

　　間。

曽我　それだけ！？
田村　あとはまあ、変わってなかったですかねえ。
木暮　変わってないの！？
田村　さっき見てきた感じだと。
曽我　伸びない町ですねえ。
照屋　25 年で、コンビニ1個。

　　柴田はしかし、少しショックで。

柴田　はーけど、あの映画館なくなっちゃうのか。
甲本　あれはだって、今にも潰れそうだもんねえ。
曽我　もう、傾いてますからねえ。
甲本　物理的に傾いてるからねえ。
柴田　なんか、ちょっとショックかも。
田村　いい映画館だったらしいですけどねー。
柴田　ああ……。
伊藤　知ってるんだ。
田村　昔、僕のお母さんが、よく行ってたらしいんで。
柴田　お母さん？
田村　ええ。お母さんも昔、ここの学生だったんですよ。
皆　へー。
田村　ちょうどしかも、今ぐらいの。
曽我　ええじゃあ、今、この周辺にいるってこと？
田村　そうなんです。なんで、映画館の周り、ウロウロしてみたんですけど、やっぱり分かんなかったですね。
皆　あー……。

　　皆は、目くばせし合いつつ。

甲本　っていうか、会わなくてよかったよねえ。
皆　うんうん……。
曽我　会ってたら、まずいことになりそうですよねえ。
甲本　この息子は……。
田村　どういうことですか？

照屋　（田村に）産んでもらえなくなるかもしれないからねえ。
皆　いやいや。
曽我　そこまで言っちゃうとあれですけど。
田村　（笑って）いやいや、大丈夫ですよ。だって、僕を産んでくれたお母さんですよ？
甲本　いやだから、まだ生まれてないから。
木暮　この時点では。
照屋　産んだ覚えのない息子が、この状態で来るわけでしょう。
甲本　びっくりするよねえ。
曽我　この未来、選びたくないですよねえ。
木暮　未来が変わるよねえ。
甲本　こう、ぼんやり消えたりして。
皆　そうそう。
田村　なんかずっと、失礼なこと言われてます？

しかし柴田は、何かが引っ掛かり。

柴田　……え、待って。今を変えると、未来が変わるの？
甲本　まあ、そりゃそうだよ。
曽我　僕ら、そうやって生きてますから。
柴田　ってことは、過去が変わると、どうなんの？
皆　ああ……。
甲本　そりゃまあ、今が変わるんじゃない？
曽我　現在が……。

伊藤も、気付いて。

伊藤　ってことは、今いる私たちは？
柴田　そうなるよねえ。
甲本　どういうこと？

柴田は考えつつ、皆に説明。

柴田　例えば、昨日に行った3人が、リモコン取ってくんじゃん。
甲本　うん。
柴田　だけど、私たち的には、昨日は取られてないわけじゃん？　……これ、おかしくない？
伊藤　おかしい。
柴田　だよねえ。
伊藤　矛盾してる。

皆、「……？」と、考える。

曽我　それは、……今、涼しいんじゃないですか？
皆　いやいや……。
木暮　そう、うまくいけばいいけど。
甲本　涼しくないし。
照屋　（田村に）分かる？
田村　いやー、僕ちょっと、パイロットなんで。
照屋　ああ……。
甲本　だからそれ、理由になってないから。

すると木暮が、神妙なトーンで。

木暮　……いなくなるかも。
皆　？
甲本　いなくなる？
木暮　僕らが。

皆、戸惑う。

柴田　どういうこと？
木暮　分かんないけど、（黒板に図を書いて）こう過去があって、今の僕らがあるわけじゃん。
皆　うん……。
木暮　その過去がこう、変わるわけだから。
曽我　それで、いなくなるんですか？
木暮　こうだから、そこから、新しい流れができて。僕らの方はもう、存在しなくなるっていうか。この、こっちの流れ自体が。
曽我　そんなことになるんですか？
甲本　リモコン取ってきたぐらいで？
木暮　分かんないけど、とりあえず、今の僕らと、辻褄があわなくなるわけだから。
伊藤　じゃあ、あの3人が過去を変えたら、私たち、いなくなるの？
木暮　可能性は……。

皆、うろたえる。

甲本　いや……。
照屋　それはちょっと、困るよねえ。
皆　うんうん。
曽我　いなくなりたくないですよねえ。
甲本　いたいよねえ。
木暮　とりあえずこう、気付かれる前に、元通りにすれば、問題ないと思うけど。
皆　？
木暮　僕ら的に、成立してればいいわけだから。
伊藤　（考えて）……そっか。
曽我　昨日の僕らが気付く前に、
木暮　うん。
柴田　だけど、それって、もうすぐじゃないの？
曽我　僕らがオアシスから帰ってきて、すぐですよねえ。
伊藤　あの、コーラこぼした。
曽我　ええ。
木暮　だから、それまでに何とか、戻せれば。

一同、ジリジリして。

甲本　……ちょっとあいつら何やってんだよ。
曽我　遅いですよねえ。
田村　なんか、大変なことになっちゃいましたねえ。
皆　いやいや……。
木暮　なんで他人事なの？
田村　だって、僕は時代が違いますし。
木暮　いや、君にとっても過去だから。
田村　ええ？
曽我　っていうか君、何してくれてんの！
皆　うんうん。
甲本　危険性を、知らなすぎる！
木暮　パイロットにしても。

そのとき、窓の外から、タイムスリップの光と音。

伊藤　帰ってきた。

皆、窓際へ駆け寄る。

甲本　お前ら遅いよ……！
木暮　（庭を見て）……いない！？
照屋　タイムマシンだけが。
柴田　なんで乗ってないの？
曽我　向こうでなんか、あったんですかねえ。

戻ってきたのは、タイムマシンだけ。
皆、戸惑う。

田村　それか、遊びに行ってるんじゃないですか。
皆　？
田村　こう、今の僕みたいに。

甲本、木暮と顔を見合わせて。

甲本　……行こう。
木暮　うん。
甲本　あいつら分かってないから。

2人、窓の外へ。

木暮　(田村に)ちょっと借りるよ。
田村　ああ、どうぞ。
曽我　気をつけて。
甲本　いやいや、お前もこいよ。
曽我　いやなんでですか。
伊藤　経験者じゃん。
曽我　いやだって、グニャやばいですもん。
木暮　人数いたほうがいいから。
曽我　マジですか！？
甲本　お前、昨日に詳しいから。
曽我　いや、一回行っただけじゃないですか。っていうかみんな、昨日生きてるじゃないですか。

曽我、窓の外へ連れて行かれる。
3人、タイムマシンに乗り込む。

田村　(窓の外を見て)3人で乗れるんですねえ。
甲本　(声)早く乗れよお前。
曽我　(声)分かりましたよ。
木暮　(声)行くよ！

窓の外から、タイムスリップの光と音。

伊藤　……行っちゃった。
照屋　いやなんか、えらいことになっちゃったねえ。
柴田　余計、ややこしいことになんないかなあ。
田村　タイムマシンって、怖いんですねえ。

すると伊藤、昨日のことを思い出して。

伊藤　……(柴田に)っていうかさあ、昨日私たち、あの3人に会ったよねえ……。
柴田　え？
伊藤　ちょうど今ぐらいに。
柴田　ああ……(思い出す)。
伊藤　あれって、もしかして。
柴田　……あ。
田村　どうしたんですか？
照屋　……あ。

音楽。
溶暗していく。

やがて、音楽フェードアウト。

■シーン2

黒板に、スライド「8月 11 日」。

蝉時雨の中、照明がつくと。
そこは、誰もいない、昨日の部室。

しばらくして、カメラを持った伊藤、入り口から入ってくる。
そして、弾んだ足取りで、暗室へ。

その様子を窓の外から見ていたのは、タイムスリップしてきた3人。

小泉　……(窓から入ってきて)出た出た出た。
石松　(窓から入ってきて)間違いない。
小泉　撮影を終えて、帰ってきたわけだよね？
石松　昨日の、伊藤が。
新美　(窓から入ってきて)過去？
小泉　近過去？
石松　今これ、タイムトラベラー？

3人、「うおおー！」と、盛り上がる。

小泉　昨日じゃん！
新美　すげえ！
小泉　昨日の部室じゃん！
石松　来たー。

新美は、部室を見渡して。

新美　これ、分かりにきいー！(笑)
小泉　もう、ほとんど変化ないからね。
新美　ぼんやり、昨日みたいな。
小泉　今日と、違いが見受けられない。

石松は、入り口の脇を見て。

石松　もうだってほら。ケロヨンいないもん。
新美　ああ！
小泉　マジでマジでマジで？(振り返る)

先ほど(12 日)そこに置いた、カエルがいない。

3人　どわー！(盛り上がる)
新美　番人がいない！
石松　点線になってるもん、こう。
小泉　今はまだだから、薬局にいるわけだよね。
石松　俺にさらわれるのを待ってるから。

そして小泉、机の上に置いてある、クーラーのリモコンを手に取って。

小泉　……これさあ。
新美　おお。
石松　うわ。
小泉　壊れたよね、これ？
2人　うんうん。
新美　壊れたはずの、リモコンが……？

小泉、リモコンをクーラーに向け、ボタンを押すと。
「ピッ」と音がして、クーラーが作動する。

3人　おおー！(興奮)
小泉　ついちゃうからね！
石松　(風を感じて)爽やかー！
新美　待ちわびた風が。
小泉　もうだってこれ、自由自在だもん。

小泉、何度もリモコンを押し、クーラーをつけたり消したり。
皆、「おお、おお！」と、盛り上がる。

石松　風を操ってやがる！
小泉　風神だから。
新美　で、その、コーラに蝕まれる前のリモコンを……？
小泉　失敬するわけだよね！(ポケットに入れる)

皆、笑う。

石松　ミッションコンプリート！
新美　任務がもう、鮮やか！
小泉　もうだって、未来人だから。文明が違うから。
石松　(改めて、あたりを見回し)いや、過去かー。
新美　くー！

小泉は、曽我の言っていたことを思い出し。

小泉　っていうかあの、グニャって、なんでもなかったよね。
石松　なんでもなかったー。

新美　ほんのり無重力になるみたいな？
小泉　なんだ、あいつの忠告。
石松　（真似て）「グニャって、なりますからー」。

皆、笑う。

小泉　普通だろ。
新美　（ピコピコハンマーを手に取って）帰ったら、これで叩いてやろう。

そして石松、気が付いて。

石松　これ今、伊藤が帰ってきたってことは。
新美　（気付いて）ああ！
小泉　マジで！？
石松　野球少年たち、帰ってくるんじゃないの！？

皆、「おおー！」と、興奮する。

小泉　怖えー！
新美　どうする、どうする！？
小泉　（窓の外を指して）ちょっとじゃあ、隠れよう。
2人　おお。
小泉　庭から聞いてる感じで。

3人、窓の方へ。
その時、入り口の外の廊下から、話し声。
それは、「昨日」のSF研メンバー。

新美　……来た来た来た！
小泉　ヤバイヤバイ！（ふざけて止めている石松に）ちょっと、お前！
新美　殺される！

3人、笑いながら、窓の外へ。
入れ違いに、「昨日」の甲本と曽我、野球道具を持って入ってくる。

甲本　……だから、本当なんだって。
曽我　それ、誰から聞いたんですか。
甲本　照屋さん。
曽我　あの人よく分かんないですよ。
甲本　あの人、この学校のことメチャクチャ詳しいから。
曽我　（笑って）ええ？
甲本　お前、信じてないだろう。
曽我　いや、信じないですよだって。
甲本　残念ながらお前、カッパになるわ。
曽我　カッパになんないですよ。意味分かんないですもん、まず。

窓の外に隠れている新美、庭からピコピコハンマーを構え。
室内にいる昨日の曽我を「ピコッ」と叩き、さっと隠れる。

曽我　痛って。（振り返って）ちょ、なんすか今の。
甲本　ええ？

そこへ、昨日の木暮も、野球を終えて帰ってくる。

曽我　誰かに、叩かれたんですよ。
木暮　どうしたの？
曽我　何者かに、頭を……。
甲本　お前それ、天罰じゃない？
木暮　（あっ、という感じで）カッパ様。
曽我　だから違いますよ。
甲本　（木暮に）祟りがあるんだよなあ。
木暮　カッパになるっていう。
曽我　ここ2人、なんで信じてるんですか。ボールが当たっただけじゃないですか。
木暮　いやあだって、相当鋭い送球だったからねえ。
曽我　僕じゃないですもん。新美さんがよけたからですよ。
甲本　お前ちゃんと謝っといた方がいいよ？
木暮　土下座で。
曽我　（木暮に）あなた理系なのに、何をオカルト信じてるんですか。

昨日の小泉・石松・新美も、野球道具を持って帰ってくる。
（昨日のSF研メンバーは、「今日」とは服が変わっている）

石松　あちかったー。
小泉　久々に、運動したから。
新美　いやー。
曽我　もう、すぐ行きますよねえ。
小泉　すぐ行く。
曽我　アズスーンアズ。
小泉　汗がもう、半端ないから。
甲本　着替え、持ってくりゃよかったねえ。
新美　もう、運動なんてするもんじゃないね。
皆　うーん。
木暮　そんなことはないけど。

と言いながら、皆、しばし休憩する。

甲本　（得意げに）にしても、俺ら。思ったより動けてたよねえ？
皆　うんうん。
小泉　全然いけるね。
甲本　躍動感、相当出てたんじゃない？
木暮　SF研にしては。
曽我　いやあだけど、やっぱ3・3で野球は、厳しいですよね。
皆　うーん。
甲本　満塁のチャンスで、バッターいなかったからねえ。
曽我　誰が打つんだっていう。
小泉　あとあれだね、ケチャにライトは無理だね。
皆　うんうん。
新美　犬だから。
曽我　ボールともう、じゃれ合うだけになりますからね。
木暮　ピッチャーとキャッチャー以外の守備が、1人とケチャだから。
小泉　守り薄いよね。
甲本　点数がもうラグビーみたいになってたから。

そして話題は、銭湯のことへ。

石松　俺、今日オアシスで、三たびマッサージロボットに挑戦するから。
皆　いやいや。
小泉　あれはヤバイって。
石松　今日こそ耐えぬくから。
甲本　あれマジで骨折れるんじゃないの？
曽我　なんであんな、力強いんですかねえ。
新美　癒されると思いきや、懲らしめられるからねえ。
木暮　普通の人、使えないよねえ。
小泉　っていうか、あの銭湯自体、色々おかしいけどね。
皆　うんうん。
曽我　色々ある。
甲本　名前がもう、「オアシス湯」っていうのが、おかしいから。
曽我　オアシス、水ですからねえ。
小泉　しかも、どの湯船も微妙にこう、しびれるっていう。
皆　うんうん（笑）。
甲本　すべての風呂が電気風呂とつながってて。
木暮　仕切りが低くてね。
曽我　巨漢が入ってくると、溢れて、電気が通って、しびれるっていうね。
新美　あのドライヤーも、全っ然、風こないの。
皆　そうそう。
小泉　熱気がなんか、ほのかに漂ってくるっていう。
甲本　音だけ凄くてな。
新美　「その音で、これ！？」
皆　うんうん（笑）。
石松　……（腰を上げて）行こっか。
皆　おう。

皆、立ち上がる。

小泉　うわー、入りたい。
新美　早く入りたい。

一同、棚に置いてある洗面器（甲本は桶）をそれぞれ手に取って。
オアシス湯へ行くべく、部室をぞろぞろと出ていく。

曽我　（甲本を見て）……？

甲本は、皆から少し遅れて。
バイトの日払いでもらった封筒から、万札を財布に移す。

曽我　けっこう、持っていくんすねえ。
甲本　ああ……、帰りにちょっと、寄るとこあって。
曽我　買い物っすか。
甲本　うん。行って。
曽我　ああ……。

曽我と甲本も、出ていく。
それを見届け、「今日」の小泉・石松・新美、窓から入ってくる。

小泉　……（入ってきながら、笑って）これはヤバイ！
石松　（入ってきて）俺たちじゃん！
小泉　昨日と、全く同じ会話だったから。
石松　昨日の俺たちじゃん！
新美　（入ってきて）俺あんな声なのかよ。
石松　お前あんな声だよ。
新美　ダッサい声。
石松　って言ってる声がもう、ダサいから。
小泉　くだらない会話だったー。
3人　うーん（笑）。
石松　風呂の話、長い。
新美　で、行くのかよ。最終的に。
小泉　あんだけ文句言っといて。
新美　それとこれとは、別なのかよ。
小泉　ああ、結局好きなんだ、みたいな。
石松　（笑って）いや、これはやばい。
新美　タイムスリップやばい。

そして小泉は、思いついて。

小泉　っていうか、追いかける？
2人　！？
石松　マジで！？
小泉　彼らを。
新美　あと、つけて行っちゃう？

皆、「どわー！」と興奮する。

石松　怖えー！
小泉　尾行だよね！
新美　昨日の俺たちを。
小泉　オアシスに行く、かつての俺たちを。

そして新美は、窓の外へ。

新美　じゃあ、その前に。
小泉　ああ、そっか。
新美　マッシーンを、今日に送って、と。

窓の外から、タイムスリップの光と音。
新美が、タイムマシンを送った。

新美　（部屋に戻ってきて）これで奴らも、タイムスリップできるから。
小泉　優しい。
新美　友達思い。
石松　（入り口の方を指して）じゃあじゃあ、自分探しに。

皆、笑う。

小泉　もうだって、手に取るように分かるからね。
新美　行動が。

3人、昨日の自分たちを追いかけ、部室を出ていく。

蝉時雨、しばらくの間。

やがて、窓の外からまた、タイムスリップの光と音。

甲本　（声）……着いたの？
木暮　（声）じゃないかな。

「今日」から来た甲本、庭から部室を覗く。

甲本　……誰もいない。

甲本、恐る恐る部室に入ってくる。
続いて、木暮も入ってくる。

木暮　（戸惑いつつ、見渡して）昨日、か……。
甲本　あいつら、どっか行ったのかなあ。
木暮　書き置きとか、ないよねえ。
甲本　（見回して）ない。
木暮　リモコンも……？
甲本　（机を見て）ない。

続いて曽我、ゆっくりと窓から入ってくる。

甲本　とにかく、あいつら探そう。
木暮　まだ、近くにいるはずだよねえ。
甲本　曽我？

曽我は、タイムマシンに酔っている。

曽我　（気分悪そうに、座り込みながら）あー、ちょっと、待ってください。
甲本　お前、何やってんだよ。
曽我　今ちょっと、やばいんで。
木暮　グニャが？
甲本　別になんともないじゃんか。
曽我　（よし、と）大丈夫です。

曽我、立とうとして、またしゃがみこむ。

甲本　だから、何やってんだよ。
木暮　そんな、気持ち悪くないだろ。

そこへ、柴田が入り口からやってくる。

柴田　おはよう。

それは、昨日の柴田である。
3人、凍りつく。

柴田　……どうしたの？
甲本　いやいや……。
木暮　別に……。
柴田　ええ？（曽我を覗きこむ）
曽我　（会釈）ちゃす。
甲本　……行って。
柴田　ああ……。

柴田、なんだろうと思いつつ、暗室をノック。

伊藤　（声）はい。
柴田　入っていい？
伊藤　（声）ちょっと待って。

柴田　現像？
伊藤　（声）うん。

柴田は、暗室の外で待つ。
3人、戸惑う。

柴田　（3人に）今日って、撮影だったんだよねえ。
甲本　（ギクッとして）……？
柴田　野球の。
甲本　……うん。
柴田　どうだった？
木暮　……もう。
甲本　……うん。
柴田　なんで最小限しか喋んないの？
甲本　いやいや、そんなことないけど。
曽我　いくらでも喋りますけど。
甲本　なに喋る？

と言いつつ、3人は壁にへばりついている。

柴田　なんでへばりついてんの？
甲本　いやまあ……、へばりつかないこともできるし。
3人　うんうん。
曽我　どこでも動けますから。
木暮　座ったりも。
甲本　こうしたりとか。

と、3人は自在にポーズをとって見せる。

柴田　なんか今日、気まずくない？
3人　いやいや。
甲本　気まずくないよ。
木暮　フランクだよねえ。
曽我　肩とか、組みます？
柴田　ええ？

伊藤、暗室から顔を出す。

伊藤　OK。……（3人を見て）あれ？

3人、ドキッとする。

曽我　あれ、とは……。
伊藤　早くない？
甲本　……早い？
伊藤　オアシス。行ったんだよね？　服着替えてるし。

3人は、昨日と服が違う。

曽我　……行って、帰ってきたんですよねえ。
3人　そうそう。
甲本　すごい早く。
曽我　今日は、カラスの行水でしたよねー。
甲本　三羽ガラス。

柴田は、ふと棚を指して。

柴田　洗面器は？
3人　……（ギクリとする）。
柴田　ないじゃん。
木暮　……忘れたのかな。
3人　うんうん。
曽我　やっちゃいましたか、また。
甲本　すーごい勢いで出てきたから。
柴田　3人とも忘れたの？
甲本　うん。
曽我　もうだってこれ、ズッコケ3人組ですからねえ。

3人、笑う。

木暮　SF研のね。
甲本　ズッコケちゃった。

伊藤と柴田、さすがに怪訝そうに。

伊藤　なんか、怪しくない？
柴田　すっごい、怪しい。
3人　いやいや。
木暮　怪しくないよ別に。
甲本　お前らが怪しいんだよ。
2人　いやいや。
柴田　私たち怪しくないでしょう。

そこへ、小泉が戻ってくる。
それは折り悪く、「今日」の小泉である。

小泉　（テンション高く）おお！
甲本　（ギクッとしつつ）ああ……。
小泉　来たの？　来ちゃったの？（笑）
木暮　……何が？
小泉　何がじゃないよ！　なんで普通なんだよ、このご時世に！

小泉のテンションに、3人は焦る。

甲本　お前、テンション高いなあ（笑）。
小泉　（伊藤を指して）こちらさん、来ちゃってないの？
伊藤　ええ？
小泉　来られちゃったほう？
伊藤　来られる？

そわそわする3人。

小泉　（柴田に）ヤバイっしょ、俺たち。
柴田　何が？
小泉　SF研ヤバイっしょ。
柴田　ヤバイ？
小泉　SFヤバイっしょ。
木暮　（ごまかそうと）もうだって、全然SF研究してないから。
曽我　大体、遊んでますからねえ。
小泉　いや、そういう意味じゃないよ！
曽我　ああ……。
小泉　そっちのヤバイじゃないよ、ここでは！

と、小泉が危なっかしいので。

甲本　小泉。……お前、あれ。ダメ。
小泉　は？
甲本　もう、狂ってる。
小泉　何がだよ。
木暮　あれじゃない？　のぼせちゃったんじゃない？
2人　あー。
小泉　いやいや……。
甲本　長いこと入ってるからだよお前。

3人は、柴田と伊藤に、取りなすように。

曽我　まああの、そういうことなんで。
甲本　あんまり見ないであげて。
木暮　もうちょっとしたら直ると思うから。
小泉　は？
甲本　（小泉に）しかも、お前も洗面器忘れて。
曽我　ズッコケカルテットですよねー。
小泉　いや、ズッコケてないし。
甲本　（柴田と伊藤に）ほら、行って。
柴田　ああ……。
曽我　で、このことは忘れて下さい。

柴田、3人に向けて、カメラを構える。

3人　ちょちょちょ(慌てて防ぐ)。
木暮　何やってんの。
甲本　行って。
曽我　撮影、NGでお願いしまーす。
木暮　オフショットはちょっと。
柴田　……なんか、お大事にね。

柴田と伊藤は、暗室へ。
それを見届け、3人、ホッとする。

小泉　だから、なんなんだよ。
甲本　いや、お前がなんなんだよ！
小泉　はあ？
曽我　危うく、いなくなるとこでしたよねえ。
小泉　いなくなる？
木暮　どこ行ってたの。
小泉　ああ、尾行してたんだよ。
木暮　尾行？
小泉　昨日の俺たちを。
3人　！？
曽我　追いかけて行ってたんですか？
甲本　お前らそれ、何やってんだよ！
曽我　見つかったら、どうするんですか。
小泉　ええ？
木暮　あとの2人は？
小泉　ああ……石松は、もうすぐ戻ってくると思うけど、新美は、オアシス。
甲本　オアシス？
小泉　昨日の、犯人見つけに行くって。ビダルサスーンの。
3人　！？
甲本　ビダル……！
曽我　ってことは、昨日の僕らと、入ってるってことですか？
小泉　うん、見張ってるって。
甲本　あいつ、やっべー！
小泉　いやだから、なんなんだって。

木暮は、動き出す。

木暮　僕、連れ戻しに行ってくる。
甲本　おお。
木暮　あとの2人、ちゃんとしといて。
曽我　気を付けて。

木暮、出て行く。

小泉　……どうしたの？
曽我　ヤバいんですよ。
甲本　過去を変えると、マズいんだよ。
小泉　は？
甲本　お前、リモコンどうした。
小泉　ああ……、持ってるけど。
甲本　返して。
小泉　だから、なんでだよ。
甲本　過去が変わるからだよ！
曽我　僕ら、いなくなるんですから！
小泉　その、いなくなるっていうのは、どういうあれだよ。
甲本　ちょっともう、あとで説明するから。
曽我　とりあえず、一旦返してください。
小泉　今説明しろよ。

そこへ、今日の石松、薬局のカエルを持って入ってくる。

石松　ケロヨーン！
2人　！？
甲本　お前、何とって来てんだよ！
石松　ケロヨン。
甲本　だから名前じゃないよ！
曽我　なんでとって来たんですか、それ。
石松　(得意げに)2つにしようと思って。
曽我　え？
石松　こうやって、(入り口の左右に置いて)「阿吽」っぽい感じで。
甲本　ならないよ！
石松　なるよ。
甲本　だから、こっちでとったら、向こうでとれないから。
曽我　こっちでとってないからこそ、向こうでとれたんですよね。
石松　……(小泉に)なんなの、こいつら。
小泉　なんか、こんなんなんだよ。

甲本は、頼みこむ。

甲本　だから、……とりあえず、言うこと聞いて。
石松　おお。
甲本　リモコンと、ケロヨン置いて、帰って。
小泉　だから、理由を言えよ。
甲本　いなくなるからだよ！
曽我　こう、過去が変わると、現在も変わっちゃうんですよ。
石松　……分かんない。
小泉　もう、ずっと平行線だよね(苦笑)。
甲本　あの本当、……帰ってください(土下座)。
曽我　お願いします(土下座)。

石松と小泉、顔を見合わせ。
石松は、バツを出す。

小泉　うわ。ちょっと、顔上げて。
曽我　(顔を上げて)……バツじゃないですか！
甲本　帰れよ！

そうして、小泉と石松はようやく。

小泉　……帰ろっか。
石松　なんか、冷めたよね。
甲本　(喜んで)マジで？
小泉　(リモコンを出して)これ、返せばいいのね？
甲本　ごめん、なんか。

と言いつつ、小泉はなかなか手を離さない。
甲本は、無理やりリモコンをもぎ取る。

曽我　じゃあ、タイムマシンで(窓の外に、促す)。

小泉と石松、窓の外へ向かう、かと思いきや。

石松　……と言いつつ、ファミコンを取ったりして(取る)。
曽我　いやちょっと！
甲本　触んなよ！
小泉　と言いつつ、机を動かしたりして(動かす)。
曽我　だから！
甲本　変えんなよ過去を！
曽我　なんなんですか、あなたたち！
小泉　……(石松に)行こう。
石松　こんな怒られる？

と言いながら、2人、窓の外へ。

曽我　それ(タイムマシン)、戻してくださいよ。
甲本　俺ら、帰れなくなるから。

石松は、なおもふざけて。

石松　といいつつ、草をむしったりして(見せる)。
甲本　……いいよ、それぐらいなら。
小泉　(声)行くよ？

窓の外から、タイムスリップの光と音。
3人が帰ったのち、甲本と曽我、ため息。

甲本　……あいつら、めんどくせー。
曽我　あとはじゃあ、新美さんですか。
甲本　うん。あとケロヨンと。

そこには、石松が持ってきたカエルが。

曽我　ああ……(うなだれる)。
2人　めんどくせー！
甲本　とりあえず俺、薬局に戻してくるから。お前、この辺ちゃんとしといて。
曽我　分かりました。

甲本は、カエルと持ち上げようとして。

甲本　……これ、意外と重い。
曽我　ああ……。
甲本　そして熱い。
曽我　行けますか、一人で。
甲本　開けて？

曽我、入り口のドアを開け。
甲本はカエルを持って、返しに出ていく。

曽我　(部屋を眺めて)……。

曽我、イスを戻したり、机を微調整して、復元する。
そして、ふとクーラーのリモコンを手に取り。

曽我　……！

何かを思いついた曽我。
部室からビニール袋を取り、リモコンを入れて包む。
そして、セロハンテープを「ビーッ」と取り、何度か止める。

そこへ、窓の外からタイムスリップの光と音。

曽我　……？(窓の外を見る)

小泉、血相変えて入ってくる。

小泉　ヤバイヤバイヤバイ！
曽我　いやちょっと！
小泉　全部理解した。
曽我　なんで帰ってきたんですか！
小泉　俺らも、手伝うよ。
曽我　いや……。

田村も、窓から入ってくる。

田村　どうしたらいいですか？
曽我　田村君！
田村　なんでも協力しますよ。
小泉　向こうで、色々聞いたから。
曽我　来なくていいですよ。(田村に)お前なんで来た。
田村　僕も、未来人として。
曽我　普通の人でしょう君。なんも能力ないのに。(見て)石松さん！

石松、庭からタイムマシンを部屋に入れている。
小泉・田村、受け取って、部室の中へ。

曽我　なんで入れてるんですかちょっと！
石松　(入ってきつつ)ケチャに見つかるから。
曽我　いや、ここの方がヤバいでしょう。動物じゃないですかあれ。
石松　(気付いて)そっか。
曽我　なんすかあなたたち。帰ってくださいよ。

そこへ、入り口から入ってきたのは、照屋。

照屋　おお。

皆、固まる。

照屋　(タイムマシンを見つけて)何それ。……タイムマシン？

小泉・石松・田村、照屋に向かって動き出す。

小泉　……ちょっとすいません。ちょっとすいません。
照屋　いやいや……え？

3人、照屋を押し戻す。

小泉　ちょっとすいません。
照屋　どうしたの？
石松　ちょっと、なしで。
照屋　なし？

小泉、照屋を外に出して、ドアを閉める。

小泉　……ヤバイヤバイヤバイ！
曽我　今、思いっきり見られたじゃないですか！
石松　どうしよう！
田村　さっそくピンチ！
曽我　なんすか、なしって。もう大混乱ですよ！
小泉　(タイムマシンを指して)とりあえずこれ、隠そう。
石松　おお。
曽我　今さら遅いですよ。え、ちょっと……。

3人、曽我をタイムマシンに乗せる。

石松　お前、乗って。
曽我　いや……！
田村　いつでもいいですよね？(ダイヤルを適当に回す)。
小泉　うん。
石松　(曽我に)10分後ぐらいに戻って来て。
曽我　いや、やめてくださいよちょっと。
田村　いきますよ！
曽我　いや、だから、ああ！

田村、タイムマシンのレバーを引く。
光と音とともに、タイムマシンが曽我を乗せて消える。

石松　……よし。
田村　とりあえず、こっちはOKですよね。
小泉　あとは、あっちだから。
2人　おお。
小泉　しぜーんにね。昨日だよ？
石松　(言い聞かせるように)昨日。

石松・田村、気持ちを整える。
小泉、照屋を招き入れる。

照屋　(ほくほく入ってきて)どうしたの。
小泉　いやなんかもう、しっちゃかめっちゃかだったんで。
照屋　(部屋を見て)あれ。……タイムマシンは？
小泉　？
照屋　今あったじゃん、ここに。タイムマシン。
小泉　いやちょっとなんか、聞こえないです。
照屋　タイムマシン。聞こえるよね？
小泉　ええ……。
照屋　あったでしょここに、タイムマシンが。

小泉、首をかしげる。

小泉　……(石松に)夢？

石松　夢……？
照屋　いや夢じゃないよ。（置いてあった場所を指して）ここにはっきりあったでしょう。
石松　いや、ないですよねえ。
小泉　床でしたよ？
照屋　床？
石松　めちゃくちゃ床でした。
田村　なんか、白昼夢でも見たんじゃないですか？
小泉　それだ。
石松　疲れてるんですよ。
照屋　僕が、疲れてる？
小泉　っていうか、常識で考えて下さいよ。
田村　（笑って）タイムマシンなんて、ないですから。

3人、笑う。

照屋　（田村を指して）誰？
田村　え？
照屋　さっきから溶け込んでくるけど。
石松　（とっさに肩を組んで）僕のいとこなんですよ。
田村　ええ。
小泉　夏休みを利用して、遊びにきてるっていう。
照屋　あー、そうだったんだ。
田村　よろしくお願いします。
照屋　それはそれは、こっちこそよろしく。
田村　ええ。
照屋　全然、そう見えないねえ。
小泉　いとこだから、そんな似てないですよ。

照屋は、部屋を見回して。

照屋　曽我君は？
小泉　え？
照屋　いたよねえ、曽我君。さっき4人だったよねえ。
3人　……。
田村　帰ったんですよ。
照屋　帰った？
小泉　なんか、ものすごい急いで。
石松　窓からバーっと。
照屋　出てったの？
田村　なんか、バイトの面接忘れてた、って言って。
小泉　居酒屋だっけ。
石松　（笑って）そんなやつ、最悪ですよねえ。
小泉　雇うわけないよね。
田村　えー、以上です。
石松　（暗室を指して）出て行ってください。

照屋、腑に落ちない様子で、暗室のほうへ。

小泉　一個も矛盾ないんで。

照屋、暗室をノックする。

柴田　（声）はい。
照屋　入るよー。
柴田　（声）ちょっと待ってください。
照屋　はーい。

照屋、暗室の外で待つ。

小泉　……入れなかったんですか。
照屋　うん。

3人、そわそわする。

照屋　（田村に）なんでわざわざ大学まできたの。
田村　え？
照屋　こんなへんぴなとこまで。
田村　いやまあちょっと、見学っていうか。
石松　大学来るの、初めてらしくて。
照屋　なんか、面白いもんあった？
田村　ええ？
照屋　僕、この学校のこと色々詳しいから。
小泉　もうだって、長いですもんね。
石松　学長に講釈を垂れる男だから。
照屋　なんでも聞いてよ。なんでも答えられるから。
田村　ああ……、じゃあちょっとあの、質問なんですけど。グランドの端になんか、カッパみたいな、銅像が立ってるじゃないですか。
照屋　カッパ様。
田村　あれ、カッパ様っていうんですか。あれって、なんなんですか？
照屋　（嬉しそうに）あれは、ちょっと話せば長くなりますよ、と。

照屋、イスに座り、じっくり語る形に。

田村　ああ……。
小泉　もう、語る態勢だから。

そして、照屋の語りが始まる。

照屋　……その昔、このあたり一帯は、沼だったんだよ。
田村　ええ。
照屋　で、その沼は、非常に深くて、危ないからみんな近づかないようにしてたんだよ。だけどある日、ひとりの村人が、その近くを通り掛かると、誰かがこう、その沼で泳いでいたと。
田村　ええ。
照屋　で、これはちょっと大変だということで、村人はもう、村の人たちを呼びに行って、みんなで助けにきた。するとそこでなんと、泳いでたそいつが、みんなの目の前でふと、姿を消したんだよ。
田村　ほう！
照屋　で、おや、と思って近づいてみたものの、そこにはもう誰もいなくて、ただただ生暖かい風が、吹くばかりだったという……。
田村　はあー。
照屋　それが、カッパ様だということだ。

語り終わった照屋、声もすっかり語り部っぽく。

石松　いや、不思議だよねえ。
皆　うーん。
小泉　語り部の口調になったからね。
田村　それで、あの銅像ができたんですか。
照屋　そういうことなんだよ。
田村　はー。
石松　勉強になった？
田村　ええ。

そして、暗室から声が。

柴田　（声）いいですよ。
照屋　（暗室に）はーい。（田村に）じゃあ、またなんでも聞いて。
田村　ええ。
照屋　なんでも答えられるから。
石松　お疲れ様です。

照屋、暗室へ。

小泉　……ヤッバかったー！
2人　うんうん。
田村　もう、危機一髪ですよね。
石松　なんとか、ごまかした。

そこへ、外で待っていた甲本、入ってくる。

甲本　お前ら、何やってんだよ！
3人　おお。
甲本　なんで？　なんで戻ってきてんの？
小泉　いやいやもう、ヤバかったんだよ。

甲本　そしてなんで話し込んでんの？
田村　聞いてたんですか。
石松　お前らを手伝いにきたんだよ。
田村　何したらいいですか？
甲本　いいよ来なくて！
田村　ええ？
甲本　人手足りてるから。（田村に）お前、なんだ。
田村　未来人として。
甲本　マジで帰って。余計こじれるから。
小泉　ああ、それが、まだ帰れないんだよ。
石松　タイムマシンが今、出払ってて。
小泉　曽我を乗せて。
甲本　……どういうこと。
田村　さっき、見つかりそうになったんで、こう、どっかに飛ばしたんですよ。
石松　いやだけど、いかんせん、どこ行ったか分かんないからねえ。
3人　うーん。
小泉　いかんせん。
田村　適当に合わせちゃいましたからねえ。
小泉　っていうかあれ、やばかったー（笑）。
3人　うんうん。
石松　ぶっちゃけ、見られてたもん。
3人　（笑って）うんうん。

甲本は、そんな3人の会話を聞いて。

甲本　……お前らあの、絶交。
3人　いやいや。
小泉　なんでだよ。
甲本　荒すぎる、仕事が。
石松　（思い出して）っていうか、新美呼びに行かないと。
3人　おお！

3人、走り出ていこうとする。

甲本　（慌てて制して）いやだから、いいよ行かなくて！
小泉　え？
甲本　多いから。待ってればいいからここで。ちょっと本当、じっとしてて！何もしないで！

と、甲本の剣幕に気圧されて。

小泉　……そんないっぱい言わなくてもねえ。
石松　こんないっぱい言うやついる？
甲本　いっぱい言うよ。
田村　心外ったらありゃしないですよねえ。
2人　うんうん。
小泉　ありゃしない。
石松　本当、ありゃしない。

そして甲本、リモコンが見当たらないことに気付いて。

甲本　……お前ら、リモコンは？
小泉　え？
甲本　クーラーの。どこやったの？
小泉　いや、返したじゃんさっき。
甲本　だから、その後だよ。
小泉　あと？
甲本　ないじゃん。
小泉　いや、知らないよ。
甲本　……マジで？

甲本、机の下などを探す。

石松　……ありゃしない？
小泉　ありゃしない？
甲本　いいよ流行んなくて。ちょっと、探して。あれないとヤバいから。
石松　（気付いて）そっか、過去が変わるんだ。
小泉　ああ！

石松と小泉、机を動かしたりして派手に探す。

甲本　おい！　何やってんだよお前ら！
小泉　ええ？
甲本　過去を動かすなよ！
2人　ああ……。
甲本　もっとだから、地味に……。

田村、暗室のドアをノック。

伊藤　（声）はい。
甲本　いやいやいや。それは分かんない。
田村　聞こうと思って。
甲本　ありえない。

伊藤、暗室から出てくる。

伊藤　（出てきて）はい。
甲本　（すかさず）なんでもない。
伊藤　は？
甲本　（ヒジが）当たった。
伊藤　ああ……。

甲本、伊藤を暗室に押し込み、ドアを閉める。

田村　ダメなんですか？
甲本　……（ため息）
小泉　田村君、そりゃないわ。
石松　そら甲本怒るわ。
甲本　……お前ら、わざとやってるだろ。
3人　いやいや。
小泉　そんなことないよ。
石松　真剣だよ。
甲本　もう本当、面白くしなくていいから、
小泉　だからしてないって。
甲本　ちょっと本当、つつましく探して。
石松　（探して）いやだけど、ないよねえ。

そこへ木暮、新美を連れて帰ってくる。

甲本　お帰り。
小泉　新美！
新美　おお。
木暮　まだみんないるの？
甲本　帰したのに、戻ってきちゃったんだよ。
木暮　ええ？
新美　（石松と小泉に）オアシスにいたのに、連れ戻されちゃったよ。
石松　お前、マジでヤバかったよ。
小泉　もう、消えるか否かだから。
新美　は？
木暮　（甲本に）タイムマシンは？
甲本　曽我といっしょに、どっか行ってるらしいんだよ。
木暮　なんで？
田村　ちょっと隠しにいってて。
小泉　照屋さんに見られて。
木暮　いや……！？

新美は、田村と初対面で。

新美　（田村を見て）誰これ。
皆　ああ……。
田村　2028 年の、田村です。
新美　は？
石松　未来人。
小泉　タイムマシンの持ち主なんだよ。
新美　君が！？
田村　どうも、お疲れ様です。

新美　おおー！

新美と田村、話しだす。

甲本　で、さらにヤバいのが、なんか今、リモコンなくなってて。
木暮　クーラーの！？
甲本　で、今ちょっとあの……

新美と田村の会話がうるさい。

甲本　うるさいよ！
新美　なんだよ。
甲本　（木暮に）だから今、リモコン探してんだけど。
木暮　この部屋で、なくなったの？
甲本　うん……。

小泉は、窓の外を指して。

小泉　あれは？　ケチャがバーッと、持って行ったりとかは？
皆　ああ。
石松　こう、窓から。
新美　いや、ケチャは入って来れないよ。
石松　え？
新美　あいつのジャンプ力は 40 センチ弱だから。
石松　ああ……。
小泉　なんの知識だよ。
木暮　（思いついて）曽我は？　ほら、タイムスリップして行ったって。
甲本　ああ……。
田村　（思い出して）そういえば、あの人、なんか持ってましたよねえ！
石松　（思い出して）こうなんか、リモコン的なものを。
甲本　マジで？
木暮　リモコン的？
小泉　（思い出して）こう、のべ棒的な……。
甲本　いや、それはもうリモコンだよ。
木暮　間違いなく。

その時、窓の外からタイムスリップの光と音。

石松　帰ってきた。
小泉　曽我！

曽我、窓から入ってくる。
全身ずぶ濡れであり、泥や藻だらけ。

甲本　お前、どうしたんだよそれ！
小泉　ずぶ濡れじゃん！
木暮　何があったの？

曽我は、そこにあったタオルで、体を拭きつつ。

曽我　……沼ですよ。
小泉　沼？
曽我　99 年前の沼に落ちたんですよ！
石松　あの、カッパ様の！
甲本　お前じゃあ、99 年前に行ってたの？
曽我　もう、適当にダイヤル合わせられて、長めのグニャのあと、ドボンですよ。
木暮　いきなり沼だったの？
曽我　一瞬、何がなんだか分かんなかったですもん。
木暮　ああ……。
小泉　よく帰ってこれたなあ。
田村　沼、深かったでしょう。
曽我　あんたら、送り込んだからでしょう。

甲本は、すかさず曽我に聞く。

甲本　曽我。お前、リモコンどうした。
木暮　クーラーの。
石松　行くときお前、持ってたじゃん。
曽我　……！（口を押さえる）
木暮　どうしたの？

曽我、頭を抱える。

甲本　だからどうしたんだよ。
小泉　言えよ。
曽我　……沼ですよ。
甲本　沼？
曽我　沼に、落としてきたんですよ。ハマったときに。

皆、「！？」と驚く。

甲本　マジで？
木暮　忘れてきたの！？
曽我　ええ。……あー！
石松　（怒って）お前、何やってんだよ！
小泉　なんで手に持ってんだよ！
曽我　いやだって、乗るつもりなかったですもん。
田村　（怒って）あなた自分がやったこと、分かってますか？
曽我　僕！？

甲本は、曽我を窓の外に促して。

甲本　曽我、取りに行ってこい。
皆　うんうん。
木暮　今ならまだ、沼に浮いてるかも。
曽我　いや、無理ですよ！　もうだって、藻がやばいですから。
石松　行けよお前。
曽我　いやもう、手足に絡むタイプの藻だったんですよ。死にそうだったんですから！
小泉　んだよ！

皆、改めて相談する。

甲本　いやだけど、これヤバイよねえ。
木暮　リモコンがないと、過去が変わるからねえ。
皆　うんうん。
甲本　普通にコーラがこぼれるだけになるっていう。

しかし、新美は気楽そうに。

新美　だから、なんでダメなんだよ。
甲本　ええ？
新美　過去が変わると。
木暮　何回説明しても分かんなくて。
甲本　ああ……。
新美　ちょっと誰か、俺に分かるように説明しろよ。
甲本　ちょっとお前今、面倒くさい。
新美　なんだよ！

そうして皆、新美を無視して会議。

曽我　これだけど、どうしましょう。
小泉　だからとりあえず、ここに同じリモコンがあればいいんだよね。
皆　ああ。
甲本　そっか、あのリモコンじゃなくても、
木暮　僕らにバレなきゃいいわけだから。
皆　うんうん。
新美　（空気を察して）何、みんな分かってんの？
曽我　いやだけど、あのリモコン、ないですよねえ。
皆　うーん。
木暮　だいぶ古いやつだからねえ。
新美　（焦って）分かってないのは俺だけ！？
石松　じゃあ、さらに昨日に取りに行くっていう。
皆　いやいや……。
甲本　だからそれ、繰り返しになるから。

木暮　おとといが変わるから。
石松　ああ……。
新美　（ホッとして）石松分かってないじゃんかよ。
小泉　例えばこう、昔に買いにいくっていうのも……ダメだよねえ。
皆　うーん。
曽我　持ち合わせないですから。
新美　それは、俺も思いついてたよ。
甲本　だけど、とりあえず早くなんとかしないとまずいよねえ。
皆　うーん……。
新美　だけどダメだと思ってたから言わなかったんだよ。
甲本　（新美に）うるさいよ！
曽我　考えてますから今。
新美　ちょっと、俺も混ぜろよ！

その時、田村が、窓のほうへ。

石松　（田村に）どこ行くんだよ。
田村　ちょっと、待っててください。なんとかなるかもしれないんで。
小泉　マジで？
木暮　心当たりあるの？
田村　分かんないですけど、とりあえず行ってみます（窓の外へ）。
甲本　だからどこ行くんだよ！

窓の外から光と音。
田村がタイムスリップして行った。

小泉　……いや言っていけよ！
曽我　何を、含みもたせて。
木暮　どっかから持ってくるのかなあ。
曽我　それだったら、またややこしくなりますよねえ。

皆、匂いにウッとなり、曽我を遠巻きにする。

小泉　っていうかお前、臭いよ。
曽我　いや、しょうがないでしょうだって。
石松　沼臭いよ。
曽我　だから、あなたが送ったからじゃないですか。なぜ目盛りを最大値に合わせた。

その時、新美がポケットからビダルサスーンを出す。

新美　デーン（掲げる）！
甲本　いや……！
新美　ビダルサスーン。
木暮　ビダルサスーン！？
甲本　お前、どうしたんだよそれ。
新美　連れ戻される前に、取ってきたんだよ。木暮の目を盗んで。
曽我　自分のとこから取ってきたんですか？
新美　せめて、誰かに盗まれる前に。
曽我　いや……。

新美は得意げであるが。

小泉　……っていうか、犯人お前じゃん。
新美　ええ？
石松　自分で自分のを取ってんじゃん。
新美　……（気付いて）あっ！
皆　いやいや。
曽我　何やってんですか！
小泉　自業自得じゃん。
石松　自給自足じゃん。
甲本　これは……どうなんだろう。
木暮　うまく回ってるから、セーフなのかなあ。
新美　（ショック）俺だったのかよ……！
石松　お前、ナンセンスだなあ。
曽我　一人上手ですよねえ。
小泉　っていうかやっぱり、お前がつまんないやつだよ。

そして、窓の外から、タイムスリップの光と音。
田村が戻ってきて、窓から入ってくる。

木暮　どこ行ってたの。
田村　これで、いいんですよね。（リモコンを皆に見せる）
皆　！
曽我　リモコン！？
甲本　お前それ、どっから取ってきたんだよ。
田村　なんとですね、2029 年の、3月です。
曽我　2029！？
木暮　未来から持ってきたの？
田村　そうです。っていうか、貰ってきたんですけど。
甲本　貰った？
田村　こう、さらに半年後の、僕から。

皆、どよめく。

木暮　じゃあ、自分たちに会ってきたの？
田村　いややっぱ、さすがに話早かったですね。
木暮　ああ……。
田村　どうぞ（リモコンを渡す）。
曽我　おお……（受け取る）。
田村　未来から取ってくるのは、問題ないんですよね。
甲本　いや、ない、けど……。
曽我　っていうか、なんで未来にあんの？
田村　いやだって、ずっと使ってるんで。
曽我　え？
田村　（クーラーを指して）あれ。
皆　！？
木暮　ずっと同じクーラーなの！？
田村　ええ。
石松　25 年間？
田村　そうなりますね。

皆、驚く。

曽我　これあと 25 年！？
小泉　寿命長げー。
石松　これあと四半世紀もつんだ。
田村　なんで、まあよかったら（リモコン）使ってください。
木暮　いやまあ、そりゃあ……。
甲本　ありがたく使わせてもらうけどねえ。
皆　うんうん……。

曽我は、リモコンを、そうっとテーブルに置いて。

曽我　じゃあ、こういう、ことですか？
甲本　これにコーラがこぼれて、解決。
木暮　そういう、ことだよねえ。
曽我　……思わぬ、解決でしたねえ。
皆　うんうん。
小泉　なんか、すごいウルトラC出たよねえ。
甲本　一回こう 25 年経って、戻ってきてるからねえ。
曽我　アクロバティックですよねえ。
皆　うーん。
木暮　ってことは、あの修理に出してるリモコンが直るってことか。
甲本　あの、電器屋のオヤジの。
曽我　そういう、ことなんですかねえ。
小泉　未来にあるってことはねえ。
新美　……もう、全然分かんないよ。
石松　（田村に）いやだけど、来年以降つらいよ？
皆　あー。
田村　え？
小泉　クーラーのない夏がくるから。
曽我　それ考えるとちょっと、申し訳ないですよねえ。
甲本　といつつ、返しはしないけど。

皆、笑う。

石松　コーラびたしにするけど。
田村　ああ、大丈夫ですよ。もうそれ、いらなくなったんで。
小泉　ええ？
田村　ついに、自治会に申請が通ったんですよ。
木暮　申請？
田村　新しいクーラーを、買ってくれるっていう。なんで、全然壊してもらっていいんで。
皆　！？
甲本　っていうか、やっと買い換えんのかよ！
田村　（しみじみ）長かったですねー。
小泉　なんか、初めて仕事したよね。
石松　不動の自治会が。
曽我　自治会、あったんすねえ……。
木暮　じゃあ、三月に行ったのも、そういうこと？
田村　ええ、予算の割り当てが出る時期なんで、ひょっとしたらと思って。
曽我　（田村を指して）ちゃっかりしてますよねえ。
甲本　もっさりしてる割に。

皆、笑う。

田村　この時代は失礼な人ばっかりなんですか？
石松　（気付いて）っていうか、そろそろ帰んないと。
皆　ああ！
小泉　そうだ！
曽我　昨日の甲本さん、帰ってきますもんねえ。
小泉　ちょっとじゃあ、行こう。
皆　うん。

皆、窓の外へ。

甲本　いやいや待って。俺？
小泉　いやお前だよ。
皆　うん。
甲本　いや、俺じゃないよ。
曽我　あなた、一目散に帰ったじゃないですか。
皆　うんうん。
甲本　違う違う。昨日はお前らの方が早かったじゃん。
皆　いやいや。
小泉　お前だろう。
石松　お前着替えてたじゃん。
甲本　は？
曽我　「は」じゃないですよ。
田村　どうしたんですか？
甲本　昨日はだって、俺買い物行ってたから。なんで覚えてないの？
皆　いやいや……。
小泉　お前、ひっぱたくぞ？
甲本　は？
曽我　昨日あなた、先帰ってたじゃないですか。
石松　俺らと別れて。
小泉　それでなんか、鍵閉めて。
皆　うんうん。
甲本　ちょっと待って、なんの話？
小泉　だから昨日の話だよ。
甲本　俺だって昨日、チケット買いに行って、帰ってきたら全員いたじゃん。それでなんか、色々言われて。
石松　チケット？
木暮　甲本。……本当に覚えてないの？
甲本　だから俺、いなかったから。
新美　チケットってなんだよ。
小泉　（皆を制して）ちょっと。

廊下から、ざわざわと話し声が聞こえる。
皆、戸惑う。

新美　帰ってきた！
曽我　あれ、僕らですか！？
甲本　だから言ってんじゃんかよ。
木暮　（甲本に）鍵かけて。
甲本　？
木暮　早く！

甲本は、木暮に言われるままに、入り口に鍵をかける。

小泉　（皆に）行こう。
皆　おお。
新美　殺される！

皆、慌てて窓の外へ出ていく。
入り口の扉を、ガチャガチャと開けようとする音。
廊下から、「昨日」のSF研メンバーの声が聞こえる。

小泉（声）「あれ？」
曽我（声）「どうしたんですか？」
小泉（声）「なんか、鍵かかってんだよ」
曽我（声）「ええ？」
小泉（声）「ほら」

田村　（窓の外で、タイムマシンに乗って）これこんな乗れます？
新美　だから早く行けよ！

木暮は、窓から出ようとする甲本を止めて。

木暮　甲本は、ここに残ってて。
甲本　なんでだよ。
木暮　昨日ここにいたから。
甲本　ええ？
木暮　僕らが帰ってきたときに。
甲本　いや……！
新美　（声）木暮！

木暮も、窓の外へ。

昨日のSF研メンバーは、入り口の扉を開けようとしている。
小泉（声）「おい！　ちょっと、スペアキー」
石松（声）「俺持ってる」

木暮　（窓から顔を出して）とにかく、適当に話合わせて。
甲本　いやだって、俺ももうすぐ帰ってくるじゃん。
木暮　その前にうまく戻ってきて。
甲本　いや、どうやってだよ。

木暮、窓の外でタイムマシンに乗り込み。

田村　（声）乗れてます？
甲本　いやいや、木暮。
田村　（声）行きますよ！
甲本　ちょっと分かんないよ。木暮！

窓の外から光と音。
甲本以外の一同、タイムスリップして行った。

甲本　……！？

と同時に、入り口が開き。
昨日のSF研のメンバー達、洗面器を持ってぞろぞろと入ってくる。

石松　（甲本を見て）あっれ。
小泉　（見て）ええ？
曽我　（見て）甲本さん。

部室に残された甲本、たじろぐ。

新美　何お前、先帰ってたの？
甲本　ああ……うん。

曽我　買い物、行かなかったんですか？
甲本　ああ、やめた。なんか、だるくなって。

小泉は、甲本の服を見て。

小泉　っていうかお前、服着替えてんじゃん。
皆　うん。
曽我　着替え、持ってなかったですよねえ。
石松　なんで？
甲本　……あの、家帰って、着替えた。
木暮　家？
甲本　一旦ちょっと。
新美　じゃあなんで鍵閉めてんだよ。
皆　うんうん。
石松　閉めなくていいじゃん。
甲本　ああだから、家に帰って、着替えを持ってきて、ここで着替えた。
皆　いやいや。
曽我　どういう行動なんですかそれ。
木暮　二度手間じゃん。
小泉　家で着替えろよ。
甲本　いやまあ、そうなんだけど。……っていうか、やっぱ俺、買い物行ってくるわ。だるくなくなって。

甲本、しれっと出ていこうとする。
が、皆、甲本をブロックする。

小泉　怪しすぎる。
皆　うん。
甲本　（笑って）怪しいって、何がだよ。
曽我　何もかもですよ。
石松　出て行きたすぎる。
甲本　は？
新美　お前、なんかあるなあ。
甲本　いや、何もないよ。
石松　俺らになんか、隠してんなあ。
甲本　だから、何をだよ。なんにも隠してないよ。

小泉は、推理して。

小泉　えー、お前は今から、……女と会いに行くんだろ！
皆　ヒュー！
小泉　ナオンと待ち合わせしてんだろ！
皆　ヒュー！
甲本　いやいや、それはしてない。ヒューじゃない。

皆も、合点して。

曽我　だから、ここで着替えて、出ていこうとしてたわけですよね。
皆　うんうん。
木暮　僕らをだましてね。
小泉　あらかじめ一軍の服を用意しといて。
石松　はい、全部つながった。
皆　うんうん。
曽我　点と点が線になった。
甲本　いやだから、違うから。

皆は、甲本を取り囲み。

小泉　えー、誰？
石松　どんな女？
木暮　僕らの知り合い？
新美　ブス？
甲本　だからその、待ち合わせとかしてないから。ブスってなんだよ。
皆　ヒュー！
石松　かばってやんの。
曽我　これもう、いるってことですよねえ。
小泉　っていうかもう、いないっていうのがもう、いるからね。
皆　あー。
甲本　いやいや、意味分かんないよ。

しかし新美は、皆をいさめて。

新美　分かった分かった。もうもう、行かせてやろう。
皆　え？
新美　そんな俺らも鬼じゃない。
曽我　まあ、千載一遇のチャンス……。
新美　ええ、その代わり、……罰ゲーム！

皆、「うぇーい！」と盛り上がる。

甲本　はあ？
小泉　それは、しょうがない。
石松　んーまあ、裸踊り。

皆、「いぇいー」と盛り上がる。

甲本　いやだから、なんの罰だよ！
曽我　僕らを欺いた罰に決まってるじゃないですか。
小泉　その、お前は、魂が汚い。
石松　性根がみすぼらしい。
曽我　悔い改めよ。
新美　みそぎたまえ。
甲本　（切り抜けようと）じゃあ、分かった。今度やるから。
小泉　……えー、今やって。

皆、「へいー！」と盛り上がる。

甲本　だからやらないよ！
石松　裸踊りを、今やって。
曽我　（盛り上げて）ポポンポン……。
新美　（暗室に）裸踊りが、始まるぞー！
甲本　いやだから呼ぶなよ！　できないから。

石松、口笛を吹くが、鳴らない。

甲本　鳴ってないし。だからちょっと、流れおかしいから。

暗室から、照屋・柴田・伊藤も出てくる。

照屋　裸踊りとは興味深いねえ。
甲本　出てこなくていいですよ！
柴田　誰がやんの？
新美　甲本。
柴田　なに、罰ゲームかなんか？
小泉　まさにそう。
伊藤　待って。写真撮ってあげる。

カメラクラブの３人も盛り上がる。

甲本　いいよ！　（皆に）あの、話を聞いて。
柴田　何？
甲本　裸踊りとか、できないし。おかしいし……っていうか俺、出なきゃいけないから。
新美　は？
甲本　ちょっと、時間なくて。だから、……帰る。

甲本、皆をすり抜けて、走って逃げようとする。
が、皆に「いやいやいや」と、捕まってしまう。

甲本　だから、本当やばいんだって！
小泉　やろう？　一回、やろう？
皆　うんうん。
照屋　稽古不足を幕は待たないから。
石松　もうだって、こうだもん（入り口の扉に立ちはだかる）。
新美　あら。
石松　ぬりかべ。

皆　あー。

甲本、外へも出られなくなり、進退窮まる。
そこでとっさに、窓の外を見て。

甲本　(なんだあれ、という風に)……？
小泉　……なんだよ。
甲本　(窓の外を指して)いやいや、あれ。
小泉　え？
甲本　あのほら、煙突の近くの。

皆、甲本の指す方向を見る。
甲本、その隙に帰ろうとするが、石松が邪魔で出られない。

甲本　(焦って)……！

甲本、そこにあった掃除ロッカーに入り、隠れる。

曽我　(窓の外を見て)煙突？
伊藤　(窓の外を見て)……煙突が見つかってない。
柴田　(窓の外を見て)……煙突なくない？
小泉　(甲本を振り返って)煙突ないじゃん……？
曽我　あれ？
石松　どこ行った？

そこへ、「昨日」の甲本が、オアシスからちょうど戻ってくる。

小泉　……(見て)おお。
甲本　……何？
曽我　桶、持ってるじゃないですか。

甲本は、銭湯帰りで桶を持っていた。
皆、「うぉーっ！」と盛り上がる。

柴田　本当にやるんだ！
石松　お前、盛り上げるなあ。
照屋　煽り、100 点だよねえ。
小泉　結局やるんじゃん。

しかし、昨日の甲本は状況が掴めず。

甲本　いやいや……分かんない。
皆　いやいや(笑)。
小泉　分かんないじゃないよ。
曽我　(煽るように)もうじゃあ早速、やってもらいますか？
新美　例の、罰ゲームを！
皆　おおー！(盛り上がる)
甲本　……は？
石松　いやこれは、いさぎいい。
曽我　なかなか出来ないですよねえ。
小泉　普通やんないからね。
柴田　どんな形から入んのかな。
伊藤　(カメラを構えつつ)初めて見る。

甲本は、戸惑いつつ。

甲本　いや待ってあの、全然分かんない。
新美　は？
甲本　流れが、見えない。
皆　いやいや。
小泉　だから早くやれよ。
曽我　引っ張るほどのもんでもないでしょう。
照屋　今、いい流れ来てるから。
曽我　(甲本の桶を指して)それ使ってこう、やればいいじゃないですか。

曽我は、裸踊りの動きをしてみせる。
と、肘が長机の上の、飲みかけのコーラのボトルに当たり、倒れる。

皆は笑っているが。

柴田　(倒れたコーラに気付いて)ちょっと！
曽我　え？
皆　(気付いて)ああ！
曽我　ああ、ごめんなさい！
小泉　お前、何やってんだよ！
曽我　ちょっと、タオルないですかそこに。
木暮　タオル。
石松　(さっき曽我が沼の水を拭いていたタオルを手に取り)うわ、これなんか臭いよ？
曽我　いいですよ別に。
新美　水差すなよ。
照屋　そんなんじゃ、バイトくびになるでしょう。

曽我、タオルを受け取り、コーラを拭くが。
机の上では、クーラーのリモコンが濡れていて。

伊藤　リモコン！
皆　あーあー！
小泉　ヤバイヤバイ！(リモコンを取り、振って水気を切る)
新美　大惨事じゃんかお前。
曽我　それ、ちゃんと拭いた方がいいですよ。
新美　だからこっち拭けよ。
曽我　ああ……。
木暮　(リモコンを見て)かなり濡れたけど。
甲本　……何これ。

音楽が入り。
溶暗していく。

やがて、音楽フェードアウト。

■シーン3

黒板に、スライド「8月 12 日」。

照明がつくと、再び「今日」の部室。
甲本と、柴田・伊藤・照屋、話している。

伊藤　……じゃあ、あの瞬間、やっぱ入れ替わってたんだ。
甲本　俺がロッカーに入って、オアシスから俺が帰ってきて。
伊藤　はあー。
柴田　だってリアクションがおかしかったもんねえ。
甲本　っていうか、いきなり裸踊り求められて、対応できないから。
照屋　全然やらないなと思ってたのよ。
甲本　みんな狂ってんのかと思いましたもん。

皆、起こった出来事を、思い返しながら。

柴田　ってことは、過去は結局、一つも変わってないんだ。
甲本　めちゃくちゃ大変だったよ。
照屋　田村君も僕、会ってたわけだしねえ。
柴田　新美君は、なんか一人で回ってるし。
甲本　ほとんどもう、奇跡だから。

そして伊藤は、ふと思ったことがあり。

伊藤　……っていうかさあ、すごいこと言っていい？
柴田　何？
伊藤　(甲本に)ショック受けないでよ。
甲本　なんだよ。
伊藤　変えらんなかったりして。過去。っていうか、時間の流れ。
3人　……？
柴田　変えられない？
伊藤　だって、そう考えるほうが、逆に自然じゃない？
甲本　いやだから、俺が行かなかったら、間違いなく変わってたから。

伊藤　だけど、行ったじゃん。
甲本　ええ？
伊藤　だから、それも含めて、こう……最初から全部、決まってたみたいな。
柴田　最初から？
伊藤　うん。決められてたっていうか。
甲本　誰にだよ。
伊藤　神様とか。……（照れて）っていうと、恥ずかしいけど。
柴田　神様？
伊藤　なんか、そういう感じ。
照屋　（戸惑って）いやいや、だって、神様なんて、おられないじゃん。
甲本　なんで敬語なんですか？
照屋　……（上に会釈）。
甲本　誰に会釈したんですか？
柴田　（伊藤に）だけど、もしそうだとしたら、……どうなんの？
伊藤　いやあ、別にどうもなんないけど、ただそれだけ。
柴田　ああ……。
伊藤　（甲本に）どう思う？
甲本　どうって言われても……。

そこへ、窓の外から、タイムスリップの光と音。

伊藤　帰ってきた。

昨日に行っていた6人、次々と窓から入ってくる。

小泉　ヤバイヤバイ。
石松　あっぶなかったー。
新美　もう、死ぬとこだよ。
柴田　そんなたくさん乗ってきたの！？
小泉　……（甲本を見て）あれ？

皆、どよめく。

石松　甲本。
新美　なんで？
木暮　いつ帰ってきたの？
甲本　……帰れなかったんだよ。
木暮　ええ？
柴田　そこのロッカーに、一昼夜隠れてたんだって。
皆　？
小泉　何、どういうこと。
甲本　（ロッカーを指して）ここに隠れて、そしたら出るに出れなくなって。だから丸一日、この中にいたっていう。
木暮　普通にじゃあ、一晩過ごしてきたってこと！？
甲本　うん。

皆、驚く。

照屋　ロッカーの中で寝ちゃったらしいんだよ。
甲本　で、（曽我を指して）こいつのパンチで起きたっていう。
木暮　あー。
小泉　あの、ボクシング部の。
石松　じゃあお前、今日ずっとあの中にいたの。
木暮　もう一人の甲本が。
甲本　メチャクチャ暑かったよ。
新美　……気色わりー！
石松　お前、何やってんだよ。
甲本　だから、お前らが帰らせてくれなかったからだよ！
小泉　（考えて）いやだけど、それだったらお前、2人になるじゃん。
皆　ああ……。
石松　中の甲本と、外の甲本と。
甲本　だけど、外の甲本は、お前らを追いかけて昨日に行って、そのまま帰ってこれないから。っていうかそれで、一晩過ごして帰ってきたのが、俺だから。

皆、「……？」と考える。

照屋　……これが、どうも腑に落ちないんだよね。
甲本　いいんだよ。俺もいていいのかな、みたいになってるから。
小泉　その、お前はなに、本物？
甲本　本物だよ。ニセモノとか一回も出てきてないだろう。
小泉　ああ……。
新美　……分かんない。
田村　（タイムマシンを指して）これじゃあとりあえず、もう戻さなくていいんですねえ。
木暮　そう、いうことだよね。
甲本　俺、もういるから。
石松　ってことは、これで、オール OK？

皆、徐々に拍手。

小泉　なんか、すごい喜びづらいけど。
木暮　全部元通りってことか。
甲本　そうだよ。

皆、ホッとする。

石松　途中ヤバかったー！
小泉　リモコンなくなったからね。

甲本は、なんだか冷めている。

曽我　（甲本に）なんでそんなテンション低いんですか。
甲本　いやだって、俺にとっては一日前のことだから。
曽我　ああ、そっか。
木暮　僕らより一日長く、生きてるってことか。
甲本　（ロッカーを指して）この中で。

そして田村は、時間を見て。

田村　あのじゃあ、いきなりで申し訳ないんですけど、僕そろそろ失礼します。
柴田　帰るの？
田村　ええ。なんかみんな、ずいぶん心配してるらしいんで。
木暮　らしい？
田村　さっきリモコン貰いに行った時、怒られちゃったんですよ。
木暮　ああ……。
田村　未来の仲間と、あと僕自身からも。なんで急がないと。
皆　ああ……。
曽我　いろいろ、入り組んでますねえ。

田村は、改めて皆に挨拶。

田村　あのじゃあ、本当に色々と、ありがとうございました。
石松　いやいや、俺らの方こそ。
木暮　リモコンとか。
田村　ああ、それはまあ、そうですね。
皆　ああ……。
小泉　そこは、否定しないんだ。
甲本　割と迷惑だったよ。
照屋　昨日やっぱり、僕ら会ってたじゃん。
田村　ああ、結局そうなっちゃいましたね。
柴田　またいつか、遊びにおいでよ。
田村　ありがとうございます。
伊藤　過去を変えない程度に。
田村　ええ。
木暮　っていうか、あんまり来ないでほしいけど。
甲本　っていうか、二度と来ないで。
田村　じゃああの、お疲れ様でした。

田村、窓の外へ。

柴田　行っちゃうんだ。
新美　気を付けて。
田村　（声）皆さん、お達者で！

窓の外から、光と音。

田村は、未来へと帰っていった。

伊藤　……行っちゃった。
甲本　最後まで言葉古かったねえ。
木暮　あんまり、言わないよねえ。
曽我　にしても、変わった後輩でしたよねえ。
小泉　この中の誰より未来さがないからねえ。
皆　うんうん。
照屋　アゴも、小さくなかったし。
柴田　また来るかなあ。
甲本　どうだろ。
柴田　ええ？
甲本　だって、あんな大変な思いしたら。
木暮　もう二度と、タイムスリップはこりごりだよねえ。
柴田　ああ……。
曽我　っていうか本当、なんだったんですかねえ。

皆、改めてうなづく。

石松　タイムマシン。
小泉　結局、全然分かんなかったよね。
伊藤　改めて分かんない。
小泉　ないしね。
新美　……（窓の外の、夏空に）タイムマシンってなんだよ！

皆、笑う。

新美　今のでもう、エンディングだから。
木暮　ああ、最後のセリフなんだ。
新美　エンドロールがこう……。
曽我　夏空に。

しかし、柴田は引っ掛かっていて。

柴田　だけど、ひとつだけちょっと、分かんないことがあるんだけど。
伊藤　ええ？
甲本　っていうか、いっぱい分かんないよね。
皆　うんうん。
柴田　もちろんそうなんだけど、……昨日でリモコンなくなった時に、田村君が、持ってきてくれたんでしょ？
木暮　ああ、25 年後から。
柴田　あれってさあ、どういうこと？
木暮　ええ？
柴田　だってさ、リモコンって、昨日壊れたじゃん。
木暮　ああ……。
甲本　いやだから、それが結局直って、
木暮　そのまま、未来に。
曽我　っていうことですよねえ。
柴田　じゃあさ、あのリモコン、どっからきたの？
曽我　ええ？

皆、考える。

甲本　……（気付いて）本当だ！
木暮　回ってる！

小泉、黒板にチョークで図を描いて考える。

小泉　ええだから、（昨日）コーラで壊れて、
甲本　（今日以降のどこかで）直って、
石松　で、未来に行って、田村君が戻すと。

図では、リモコンがループしている。

皆　（図を見て）ええ！？
小泉　なんか、ループしてんじゃん！
柴田　これなんか、おかしくない？
木暮　うん。
照屋　始まりがないよねえ。
曽我　これ、どういう、リモコンなんですかねえ。
甲本　無限になんか、あるからねえ。
石松　うわ、怖い怖い。
伊藤　（思いついて）じゃあ、……別のとこから来んじゃない？
甲本　別のとこ？
伊藤　だから、あれが直るんじゃなくて、……（図を見て考える）

そこへ、窓の外にはケチャが来ている。

新美　（窓の外を見て）ケチャ。
石松　どうしたの？
曽我　（ケチャを見て）なんか、くわえてますねえ。
新美　（撫でて）よーしよしよし。

新美が、ケチャから取り上げたそれは。

新美　リモコン！
皆　！？
新美　ほら、これ！

新美、土を払って皆にそれを見せる。
汚れているが、ビニール袋に入った、クーラーのリモコン。

甲本　リモコン？
新美　これ（クーラー）と同じやつだよ。
石松　なんで？
小泉　泥まみれじゃん。
木暮　どっかから、拾ってきたのかな。
曽我　……沼ですよ。
皆　？
曽我　これ、僕が落としたリモコンですよ。僕が入れたんですよ、このビニールに。
甲本　お前が？
曽我　ええ。それが、沼からこう、出てきたわけですよ。
柴田　タイムスリップしてきたってこと？
曽我　じゃなくて、普通に 99 年経って、出てきたわけですよ。土の中から。
柴田　ええ！？
曽我　ずっと、埋まってたんですよそこに、99 年間。
石松　ケチャがじゃあ、掘り起こしてきたってこと？
曽我　そういうことですよ。ずっと掘ってましたもん、そこ。

皆、驚く。

甲本　マジで！？
柴田　ケチャ、リモコン探してたの！？
曽我　そうですよ。僕らのリモコンですもんだって。
伊藤　ずっとじゃあ、そこにあったってこと？
曽我　もう 99 年前から、あったわけですよ。
小泉　（ケチャに）お前、すごいなあ。
新美　やるなあケチャ。
ケチャ　（声）ワン！

皆、土の中から出てきたリモコンを眺めて。

柴田　これじゃあ、99 年経ってるんだ。
甲本　あんまりそう見えないけどねえ。
木暮　中身は、割と無事だよねえ。

石松は、思いつく。

石松　これさあ。……ついたりして。
小泉　……お前。
甲本　それは、お前。
曽我　沼にだって、落ちてますから。
木暮　確かにビニールは、巻いてあったけど。

石松は、ビニールから取り出し、リモコンの電池を入れ替えて。

石松　いくよ？
皆　いやいや。
小泉　いくら夢想家でも、それはお前。
石松　99 年ぶりに出てきたリモコンが……？

石松、クーラーに向け、リモコンのボタンを押す。
「ピッ」とクーラーがつき、涼しい風が流れる。

石松　ついたじゃん！

皆、驚く。

新美　すげえ！
甲本　つくのかよ！
石松　（風を感じて）爽やかー！
曽我　っていうか、なんでつくんですか？
皆　うんうん。
小泉　ついたらいいなー、と思ったけど。一瞬。
甲本　つけと思ったけど。
石松　そりゃもう、ビニールパワーでしょ。
曽我　ああ……。
柴田　これで壊れないもんなんだ。
照屋　もつもんだねえ。
小泉　（新美と石松に）これもうじゃあ、クーラー復活じゃん！
新美　思わぬ形で。
石松　ミッションコンプリート！？

3人、盛り上がる。

木暮　（曽我に）っていうか、なんでビニール巻いたの？
曽我　いやだから、コーラから守るためですよ。
木暮　え？
曽我　こう、取ってくるのがダメなんで、奴隷解放宣言……。
甲本　いや、それもダメだよ。
曽我　え？
木暮　リモコンが壊れなかったら、過去が変わるから。
曽我　……（気付いて）ああ、そっか！
木暮　気付いてなかったの！？
曽我　あっぶねー！
甲本　今気付いたのかよ。
木暮　ここ3人は、大丈夫だと思ってたよねえ。
甲本　大丈夫じゃない奴がいたねえ。
照屋　でもそれで、リモコンが戻ったわけだからね。
曽我　ああ、結果オーライですか。
木暮　そうだけど。
甲本　本当に結果オーライでしかないから。

柴田は、リモコンと、黒板の図を眺め。

柴田　ってことは、結局このリモコンが、未来に繋がんのかな。
伊藤　そういうことだ。
小泉　……どういうこと？
柴田　だから、これがさらに、あと 25 年、使われ続けて、
石松　（黒板に）書いて。
柴田　ああ……。

柴田、改めて、黒板に図を描きなおす。

柴田　だからこれが、こうじゃなくて（図の一部を消し）、このへん（別のところ）から来るんだよね。
伊藤　ケチャが掘ってくるから。
曽我　でしかもこれは、99 年前から、来てるわけですよ（図を描き足す）。
石松　沼に落ちてね。
曽我　ええ。
木暮　こうだから、昨日から、3人に飛ばされたわけだよね（さらに描き足す）。
曽我　ええ、リモコンを持って。
柴田　で、これがこう、未来まで使われ続けて、
木暮　昨日に戻って、壊れると。

リモコンは、図の中で、99 年前から 25 年後までを、行ったり来たりしている。

皆　（図を眺めて）はー……！
小泉　なんのスペクタクルだよ。
曽我　寿命、長いっすねえー！
石松　時をかけるリモコン。
甲本　そして最後、あっけないよねえ。
木暮　コーラがこぼれて終わりだからねえ。
柴田　じゃあ、やっぱあれ（修理に出したリモコン）は、直んないってことか。
曽我　もう部品がなくて、ご臨終ですよ。
小泉　……分かんない。
照屋　これは、僕もついて行けないかな。
新美　ここは、ギブアップの島だよ。

ついていけない人たち、畳のスペースに集まる。

伊藤　（曽我に）99 年前、どうだった？
曽我　どうもなにも。着いたらいきなり、沼ですよ。
柴田　空気味わったり、しなかったの？
曽我　空気っていうか、水中ですから。しかも、人に見つかったりして、大変だったんですから。
木暮　見つかったの！？
曽我　溺れてるところを見られたんですよ。で、しかもそいつが、いっぱい人集めてきて。もうだから、必死で這い上がって、逃げてきたんですよ。命からがらですよ。

皆、顔を見合わせ。

柴田　それって……。
小泉　お前、カッパじゃん！
曽我　ええ？
石松　伝説の、カッパ様じゃん。

皆、驚く。

曽我　カッパですか僕！？
新美　お前カッパだよ。
曽我　ぎえー！
伊藤　カッパ？
小泉　っていうかお前、ボール当てたからだよ。

皆、笑う。

曽我　たたりですかこれ。
新美　たたられてんなよお前！
曽我　たたられたー！
甲本　思わぬルーツだったねえ。
木暮　身近な所に。
照屋　カッパのたたりは恐ろしいってあれほど言ったのに。
曽我　いや、っていうか、カッパ僕ですから。
照屋　ああ。
新美　（思いついて）銅像。
小泉　ああ！
石松　見に行ってしまう？

3人、盛り上がる。

小泉　行ってしまおう。
曽我　行くんですか。
新美　お前もだよ。
曽我　マジっすか？
小泉　もうだってこんなの、絶対面白いじゃん。
新美　（曽我に）カッパ。
曽我　いや、やめてくださいよちょっと。

小泉・石松・新美・曽我、走り出ていく。

柴田　……(甲本と木暮に)行かないの？
甲本　いや、あのテンションは無理だから。
柴田　ああ……。
木暮　あの4人、元気だよねえ。
甲本　もう、ウザいよねえ。
照屋　(しみじみ)まさか、曽我君がカッパだったとはねえ。
甲本　いや別に、正体がカッパだったわけじゃないですから。
木暮　人間ですから。
照屋　いやあ、にしてもねえ。

柴田も、立ち上がって。

柴田　じゃあ私も、現像液買ってこよ。
伊藤　そっか、行く途中だったんだ。
柴田　ここで大脱線したの。……行ってくるね。

柴田、出て行く。

甲本　……っていうかそりゃ、脱線するよね。
木暮　タイムマシンだからねえ。
照屋　僕も、アイスこんななっちゃったよ(コンビニ袋から、溶けたアイスを取り出す)。
伊藤　ええ！？
甲本　アイス買ってたんですか。
照屋　大脱線だよ。
木暮　食べるタイミングはあったでしょう。
伊藤　戻りましょっか。
照屋　うん。

伊藤・照屋、立ち上がる。

照屋　……これはこのまま冷やすとどうなるだろうか。

照屋、暗室へ。

伊藤　(帰りがけに、甲本・木暮に)出す写真、これに決めたから。

伊藤が見せたのは、曽我が2人いる写真。

木暮　曽我が2人のやつじゃん。
伊藤　これで、部員増やす。
甲本　ああ……。

伊藤、暗室へ。

木暮　……多分、合成だと思われるよねえ。
甲本　っていうか、部室もらえないから。
木暮　(気付いて)そっか、25 年後も。
甲本　エツエフ研だから。

2人、一息つく。

甲本　……微妙に、未来が分かったっていう(笑)。

木暮は、窓際に置いてある何かに気づく。

木暮　……それ。

手に取ると、それは田村が持っていたカメラケース。

甲本　田村のじゃん。
木暮　忘れていったのかなあ。
甲本　(手に取って)未来のカメラ。

甲本、ケースを開け、カメラを取り出す。
と、どこかで見覚えのある型であり。

木暮　……古い型だよねえ。
甲本　柴田のだ。
木暮　え？
甲本　これ。同じやつなんだよ。
木暮　ああ……。

確かにそれは、柴田が持っていたのと同じカメラ。
その時、窓の外からタイムスリップの光と音。

田村　(窓から顔を出して)ああ、すいません、それ僕のです。
甲本　ああ……(カメラを渡す)。
田村　(受け取って)どうも。
木暮　取りに来たの？
田村　ええ。これなくすと、お母さんに怒られちゃうんで。
甲本　お母さん？
田村　昔、ずっと使ってたやつらしくて。……じゃあ、今度こそ本当、お達者で！
甲本　いやちょっと。

窓の外から、タイムスリップの音と光。
田村が帰ったあとで、呆然とする2人。

木暮　……お母さん？
甲本　……ずっと。

2人、顔を見合わせて。

木暮　……じゃないかな。
甲本　マジで！？
木暮　だって、映画館よく行ってたって。
甲本　うっわ。
木暮　……結局じゃあ、思いっきり会ってたってことか。
甲本　……これ、柴田に言わない方がいいな。
木暮　うん。
甲本　大分ショック受けるから。
木暮　しかも、結婚相手の苗字まで分かっちゃうし。
甲本　……え？
木暮　どんな人なんだろ。
甲本　……。

そこへ、柴田が現像液を買って、戻ってくる。

甲本　柴田。
柴田　まだみんな行ってるんだ。
甲本　……うん。

木暮は、あることを思い立って。

木暮　(柴田に)生協って開いてるよねえ。
柴田　うん。
木暮　ちょっと、行ってくる。
甲本　ああ……。

木暮が出ていき、部室には柴田と甲本。

柴田　……あのさ。さっき言ってた映画なんだけど、明日とかじゃダメ？
甲本　明日？
柴田　なんか、つぶれるって聞いたら、急に行っとかなきゃって。
甲本　ああ……。
柴田　都合悪いなら、いいけど。
甲本　ううん。……いいよ。
柴田　じゃあ、2時からのでいい？
甲本　おお。
柴田　……本当に？
甲本　いいって。2時だろ。
柴田　じゃあ明日、15 分前に、映画館の前。
甲本　おう。

柴田、暗室のドアをノックする。

伊藤　(声)いいよ。
柴田　(甲本に)よろしくね。
甲本　え？
柴田　チケット。
甲本　ああ……。

柴田、暗室へ。
甲本、一人になって。

甲本　……。

ややあって、照屋、すーっと暗室から出てくる。
そして、甲本のそばにそっと座り。

照屋　……ちょっと、話聞いてほしいんだけど。

甲本、驚いて振り返る。

甲本　いつからいたんですか。
照屋　今だけど。
甲本　なんですか。
照屋　さっきほら、伊藤が言ってた、時間の流れは変えられない、とかなんとか。
甲本　ああ……。
照屋　あれが、どうもその、飲み込みづらいっていうか。
甲本　え？
照屋　っていうのも、……最初、あの3人がこう、リモコンを取りに行ったと。
甲本　ええ。
照屋　で、その後色々あって、今ここに、リモコンがあると。これって結局、時間の流れを変えてんじゃん。
甲本　ああ……。

甲本、考える。

照屋　その、実際に経験した過去が変えられない、ってのは、なんとなく分かるんだよ。とはいえ、こう……(黒板の図を見て)これ全然分かんないんだけど、まだ見ぬ時間っていうのは、割とあいまいっていうか、変えられる余地あると思うんだよね。
甲本　あー……。
照屋　……っていうのを伊藤に言ったら、どっちでもいい、って言ってあしらわれたんだけど、これ、僕の考え方あってるよね？
甲本　……ちょっと、すいません。

甲本、紙とペンを取り、何かを考え始める。

照屋　僕の解釈のほうが、ポジティブじゃん。あっちなんか、泣きそうになるじゃん。

そこへ、小泉・新美・曽我、テンション高く戻ってくる。

小泉　(笑って)カッパカッパカッパ。
照屋　おー。
新美　(曽我と)クリソツ。
曽我　もう、そう思って見たら、どう見ても僕なんですよ。
照屋　ああそう。
小泉　こいつが、沼から這い上がるとこなんですよ。
新美　もう、こうだもん(銅像のポーズを真似る)。

皆、笑う。

曽我　やめて下さいよちょっとー！
新美　キュウリを食べるカッパー。

皆、笑う。

曽我　なんの語尾なんですか。
甲本　(たしなめて)ちょっと、うるさい。
小泉　は？
新美　なんだよ。
照屋　なんか急に、考え始めたんだよ。

木暮は、生協の袋を提げて戻ってくる。

小泉　おお。
曽我　……(袋を見て)何を買ってきたんですか？
木暮　製図用紙。
小泉　何すんの。
木暮　こう、忘れないうちに書いとこうと思って。
小泉　ええ？
木暮　タイムマシンの設計図。

皆、どよめく。

新美　お前、分かんの？
木暮　一応、さっき見てたから。
曽我　あなた凄いですねえ。
小泉　お前、凄いな。
木暮　いや、別に設計できるわけじゃわけないから。
照屋　だけど、設計図が書けるんならねえ。
小泉　いっしょですよねえ。
木暮　ブラックボックスなところはあるけど。
曽我　っていうかそれ、書いてどうするんですか。
木暮　だからこう、書いて、冷蔵庫に入れとけば。25 年後に、田村君たちが。
曽我　ああ……。

どうやらそれで、辻褄があうらしい。

新美　……その、お前の賢さが、鼻につくよ(木暮を叩く)。
木暮　なんでだよ！

石松も、戻ってくる。

石松　ういっすー。

石松は、なにかを持ってきたようだ。

曽我　なんか、持ってきました？
石松　(照屋の口調で)「ただただ、生暖かい風が吹くばかりだったという」！

石松、台車でカッパ様の銅像を、押して入ってくる。
カッパ様は曽我にそっくり。

曽我　いやちょっと！
小泉　お前マジで！？
石松　カッパ様。
小泉　いや、知ってるけど！
木暮　持って帰ってきたの！？
石松　カッパを、かっぱらってきたから。
木暮　うまいこと言わなくていいよ。
曽我　何やってるんですかちょっと。
小泉　お前、これはまずいだろ。
石松　……笑えって。
皆　いやいや。

伊藤と柴田も、暗室から出てくる。

伊藤　どうしたの？
曽我　これ、見てくださいよちょっと。
石松　カッパ様。
伊藤　ええ！？
柴田　持って帰ってきたの？
石松　カッパを、かっぱらってきたから。
木暮　いや、2回言うことじゃないよ。

曽我　笑えないですから。
伊藤　（笑って）あっはっは。
小泉　ああ、笑うんだ。
木暮　ダジャレで？

甲本は、そばにいる木暮に。

甲本　木暮。……苗字ってさあ、変えられんのかなあ。
木暮　ええ？

音楽。
暗転、カットアウト。

やがて、照明がつき。
カーテンコール。

おしまい。